

# 大学出版

大学と社会を結ぶ 知のネットワーク

NO.74  
2008.3

春

## 特集

### 書物の未来形——デジタル時代の学術出版

アメリカ型大学出版モデルのゆくえ

——「デジタル時代における大学の学術情報発信」(イサカ報告)をめぐって

山本俊明……2

デジタル・コンテンツと書物 福嶋聡……12

デジタル化を展開中の大学図書館 富田健市……17

知のコミュニケーションの核としての共同

——学術情報リポジトリと大学出版会(京都大学の試み) 鈴木哲也……21

ロシア科学アカデミー図書館

「三笠宮文庫」贈呈式に出席して 三浦邦宏……28

## ●連載

初版本、ナンセンスなフェティシズム  
平野威馬雄著『詩集 青火事』 酒井道夫……表2

大学出版部ニュース……34



有限責任中間法人大学出版部協会

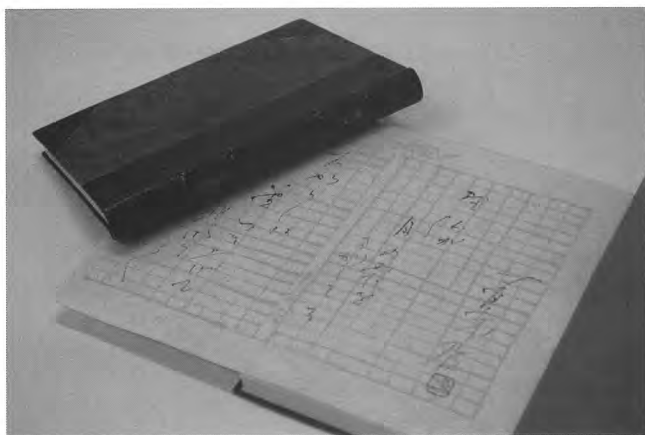
THE ASSOCIATION OF JAPANESE UNIVERSITY PRESSES

初版本、ナンセンスなフェティシズム

平野威馬雄著

『詩集 青火事』

酒井道夫（武蔵野美術大学）



巻頭に折り込まれた一冊ごとに違う自筆詩句、上は自家背革装 ©Okuyama Naoto

平野威馬雄については、愛娘レミさんのエッセイだったか、あるいは娘婿和田誠氏の文章だったかに、「潰れそうな出版社に肩入れする癖があつて困った人だった」という件を読んだように思うのだが……。私は、濤書房版のこの詩集（一九七二、印刷製本・誠文社、装丁・三谷一馬）を七〇年代に神田のゾッキ本屋で入手した。この頃、この版元には何か異変があつたのだろうか。

当時、私はまだ神田界限を徘徊する時間と体力があつたので、めつたに買うわけでもなく古書店を軒並み訪ね歩き、棚に並ぶ本を眺めるだけで大方は満足していた。まったく金がなかつたのだ。で、すざらん通りにあつて、店内をエロ本系で埋め尽くしているにもかかわらず、店頭近くの一角だけにちよつと珍しい本を置くことがある店を要チェックにしていたのだが、その日も期待がズバリ当たつた。

ここで十冊くらい平積みされていた『詩集 青火事』に遭遇したのだ。この詩集の存在を私はその時まで知らなかつたが、手に取つてページを繰つたら、本書への著者と出版社の入れ込み方に尋常でない空気が伝わつてきた。良いクリーム上質紙を用いた本文は、赤い細線で囲んで4号活字組にしている。巻頭に「青宋居」と刷り込んだ和紙の用箋が折り込まれ、ここに一冊ずつ異なつた詩句を著者自筆でしたためてあるという懲り方。初版限定九九九部中、二五二番と八七一番がいま私の手元にある。これがゾッキ価格で積み上がつていたのである。今なら買い占めるところだが、金がないというのは恐ろしいものだ。全冊を確かめて、読み易い詩句を記した折り込みがあるのを選び出し、二冊を購入するのが精一杯だった。

本文組の巧みに比して製本が杜撰だったので、一冊は、ちよつどその頃、拙くも手製本を始めたばかりのカミさんに頼んで背革装に改装した。オリジナルは元のままの姿で残し、もう一方は時々手に取つて悦に入る……。まあ、無意味なフェチですが。

特  
集

書物の未来形

— デジタル時代の学術出版

# アメリカ型大学出版モデルのゆくえ——「デジタル時代における大学の学術情報発信」(イサカ報告)をめぐって

山本俊明

(電子部会長、聖学院大学出版会)

## アメリカ型大学出版モデルの終焉？

アメリカの大学出版部は、日本をはじめとする世界の大学に、母体となる研究教育機関に基盤をおいた学術出版の規範となるモデルを提供してきた。

その特徴は、第一に、大学の生み出す研究成果を質の高い学術情報として公開することである。特にアメリカの大学出版部は、人文科学、社会科学を中心としたモノグラフの出版社である。第二は大学の一部局として出版活動により、学術情報を普及する機能を担うことである。そのため学術書の編集・制作・販売・経理の専門の担当者を育成してきた。第三に「一方では学問の目的に徹身的に密着すると同時に、他方で書籍出版の経営技術を完全にマスターして経営」(ホウズ『大学出版部』)するというビジネスモデルを打ち立てたことである。学術的価値は高いが市場に

おける需要の低いモノグラフの出版と普及を継続的に行うためには、大学などからの補助金が不可欠である。しかし漫然と補助金によって損失補填をするというのではなく、コスト管理を厳密に行い、損失を予定し、「最高の能率化と計画損失」(箕輪成男『歴史としての出版』)によって運営するという高度な経営技術を発達させてきた。厳しいコスト管理と学術情報の厳しい吟味、また読者の少ないモノグラフを適切に普及させるためのマーケティング技術のせめぎあいの中から、優れた出版物が生み出され、普及され、大学と大学出版部の名声と評価を高めてきたのである。

このようなアメリカ型大学出版モデルがいま存立の根拠から問題とされている。

二〇〇七年七月に、アメリカの高等教育における情報技術の導入を推進しているNPO法人イサカが発表した「デジタル時代における大学の学術情報発信——イサカ報告」

(以下「報告」)では、大学において急激に進展するデジタル化に対応できていない大学出版部の将来像を次のように描く。「いくつかの大学は、(既存の出版部とは別に)新しい出版部を開設する。またいくつかは出版部を閉鎖するが、その事業を教育や研究業績の評価に特化した機関に発展させる」。さらに「大学の使命からかけ離れた出版部の余命は短い。問題は出版部が完全に機能不全に陥っていないことである。時がくれば壊れる。しかしそのときでは遅すぎる」「まもなくその機能を終える。過去にしがみついているからである」などの辛らつな意見が紹介されている。「報告」は、八十八の大学出版部を対象にしたアンケート調査と、出版部長(二十六人)、学長、学務担当副学長(十四人)、図書館員(十二人)、その他(五人)に対する聞き取り調査を基にしているが、大学管理者たちから、いわば大学の内部から大学出版部に対する厳しい評価が与えられているのである。

これまでも大学出版部が一角を占める学術情報流通システム(生産・流通・保存・利用)が機能しなくなっていることに関する分析や提言が数多く発表されてきている<sup>(2)</sup>。それに対して、「報告」は、「デジタル時代に大学が学術情報の発信機能を再活性化すること」に焦点を合わせている。そのため「報告」にはデジタル環境に対応すれば、学術情報流通システムの危機がすべて解決するというような技術決定論の性格がいささか強く出ているが、他の文献で補い

ながら批判的に検討し、三つの特徴から見たアメリカ型大学出版モデルのゆくえを考えてみたい。

### 学術情報とは何か?

「報告」が第一に問題とするのは、デジタル時代に学術情報の形態が多様になったことである。これまで大学出版部が取り扱ってきた学術情報は、モノグラフであり、ジャーナルであった。しかし研究者は、プレプリントや研究報告書、学会の予稿集も学術情報として発信するようになった。またブログなどこれまで非公式とされてきた情報も学術情報と捉え、研究対象とするようになって<sup>(3)</sup>いる。学術情報の「公式・非公式の区分がほやけてきた」(ロバ)のである。さらに、イメージ、音声、音楽、映像などが学術情報として取り上げられるようになった。文字以前の文化を研究対象とする人類学ではイメージが重要な研究対象となる。これらは印刷メディアでは、困難であるかあるいは不可能であったがデジタル化されオンライン化されることによって、学術資料のオープンな利用が可能になったのである。しかし学術情報の多様性はインターネットの登場した時点で指摘されていたことで、ようやく実現されるようになったということに過ぎない。

第二の学術情報の問題は、ジャーナルである。「ほとんどの読者はジャーナルの文献にオンラインでアクセスするほうを好んでいる」(p. 8)。「ジャーナルは、学術出版の

表 1	非営利出版	商業出版
1960年代	30	0
1980年代	60	60
2000年代	100	200

中で最初にオンライン化したもので、〈学術情報〉中心となる形態である」(p. 19)。ジャーナルはいち早く電子化に対応し、研究者にどこからでもアクセスできる研究環境を提供してきた。しかし、大学出版部の多くはモノグラフ出版に重点を置き、ジャーナルを発行する出版部は「報告」によれば、十八となっている(筆者の手元にあるAAUPの二〇〇四―五年の名簿では、調査対象の八十八のうち三十三出版部、三八五タイトルであるが、十タイトル以上は、十一出版部にとどまる)。

問題は、経済学分野の英語ジャーナルではここ四〇年に発行点数が十

倍に急増したことに見られるように(p. 9 表1)、研究者の研究成果公開の方法が変化してきたということである。注2に挙げた文献でトムソンは「研究成果の公開の形態は固定的なものではない、最近の十年で重要な変化があった……査読ジャーナルが多く、学問分野で、自然科学分野を越えて、次第に重要なものになってきた。さらに一九九〇年代はじめから多くのジャーナルが印刷されたものと同様、電子的に利用されるようになっていく」(p. 84)こ

表 2	査読学術ジャーナル		モノグラフ	
	人文学科	社会科学	人文学科	社会科学
1987	1.6	2.2	1.1	2.0
1992	1.4	1.9	1.2	2.1
1998	3.3	4.4	0.8	1.5

とを指摘している。同じ注2の文献でダールトンは、人文科学、社会科学分野の研究成果の公開の形態を一九八七年、九二年、九八年で比較し、モノグラフが減少し査読ジャーナルが倍ぐらいになっていることを分析している(p. 258 表2)。もちろんモノグラフが出版できない状況もあるわけであるが、人文科学と社会科学というこれまで大学出版部が主として関わってきた分野の研究者たちの研究成果の公開方法が変化したのである。この変化に学術情報を普及する機能を担う大学出版部がどのように対応してきたのかという問いもあるだろう。

表1にあるように経済学分野のジャーナルだけをみても商業出版社は着実に市場を広げてきた。査読ジャーナル全体でみても六〇%以上(発行元四五%、学・協会の委託一七%)を発行し、商業出版社は独占的に価格を決定できる立場にたった(p. 9)。同様に一五〇〇〇タイトル発行されているといわれる査読オンライン・ジャーナルのうち、エルゼビア二〇〇〇、シュプリンガー一九五〇、ワイリー一九〇〇と市場を支配してきているのである。

第三の学術情報の問題は、より大学出版部のあり方に関わる。「報告」では大学出版部の中心的出版物であるモノグラフがデジタル時代にその使命を終えたことが、再三暗示されている。研究者は印刷メディアに依存し「モノグラフのはじめから終わりまで読むことが必要であったが、いまや全体を読むことは研究活動のほんの一部になった」(p. 7)、著者に書籍になるぐらいの議論をしてモノグラフを書くべきであるといえるかも知れないが「読者はいつものはじめから終わりまで読むとは限らない」(p. 24)、「研究成果は断片的であり、研究者はその成果をすぐにオンライン化したい。大学出版部は、依然としてカバーからカバーまで(モノグラフ出版)だけに取り組んでいる」(p. 20)。

「報告」の立場は明確であり、デジタル環境には、モノグラフ形式は効果的でないということである。むしろジャーナル形式が推奨されている。大学出版部が取り組んでいるモノグラフのEBook化への取り組みにも批判的である。アメリカ学術協会協議会(ACLS)が、カリフォルニア、ハーバードなど十の大学出版部と立ち上げたHistory EBook(二〇〇七年一月からACLS Humanities E-Book)に対しては、「中心となる文献を電子化し利用できるようにしたこと」に成果があったが、マルチメディアを基礎としたフォーマットを普及させることはなかった、またアメリカ歴史学会(AHA)とコロンビア大学出版局が制作しているGutenbergプロジェクトに対しては「制作に費

用と時間が掛かりすぎる」(p. 14)としている。そこで「報告」では、モノグラフを「ジャーナル化」(journalize)することが提案されている。モノグラフをジャーナルと同じようにサイトライセンス方式で図書館に販売できるからである。また、電子化されたモノグラフを需要に応じて「章あるいはひとつの塊に切り分けて販売することもできる」と、印刷メディアではできなかった方法も提案されている。この方法もインターネットが登場したときに、インターネットが学術研究にどのような影響を及ぼすかが検討され、その時点ですでに想定されていた。

Gutenbergでは博士論文を電子版モノグラフに再編成するときの困難が強調されているが(p. 23)、いずれにしても、さらに情報技術が発達すれば、マルチメディアを利用したり、原資料にリンクを張るなど電子版モノグラフの制作にそれほど時間も費用も掛からなくなるだろう。そうすると、より重要な問題は、「報告」が目的としている「大学のブランドを高めるために」大学から発信する学術情報はどのようなものであるのかということになる。

「報告」では、いくつかの大学出版部で、モノグラフが表している永続的な価値について議論が続いているという。そして大きな規模の大学出版部の部長のことは紹介している。「モノグラフは大学出版部のこころであり魂です。本はジャーナルとは違った役割を果たします。本は、変化を生み出す作用因として、学問分野を結びつけ、いく

つもの主題に橋を架けるように働きます。本は分野を越えた会話の基礎を形成しますし、より研究を活性化させる基礎でもあります」(p. 24)。しかし、このことは、前述したように、読者はモノグラフの全体を読むことはない、と簡単に否定されている。

インターネット、デジタル時代には、だれもが容易く、データを発信できるようになった。またこれまで触れることのできなかつた文献にアクセスできるようになった。「ACLS 提言」では、デモクラシーの観点からいえば、だれもが自由に貴重な文献にアクセスできるという大変望ましい「文化共和国」ができることになると説明されているが(p. 8-14など)、見方を変えれば、われわれは無秩序な断片化された情報の宇宙のなかに放りだされていることなのかもしれない。そこで必要なのは断片化された情報を結びつけ、ひとつの意味システムに位置づけなおすことではないか。これを一貫した議論のまとまりとして発表するものをモノグラフと呼ぶとすれば、いま大学に求められているのは、モノグラフ形式の学術情報の発信ではないだろうか。「報告」は、NetLibrary など初期の eBook 発行の実験は利用者のニーズに合わず、満足できるものではなかったが、大学出版部は、この転換期を意味あるものにするために、デジタル化に対応する基盤を形成する戦略を持つべきであると提言する。しかし大学出版部は「まだ電子コンテンツ(モノグラフ)のビジネスモデルを持っていない」

(p. 24-30)と結論づける。大学出版部が電子メディアでもモノグラフを制作できないとすれば、デジタル時代にアメリカ型大学出版モデルは終焉することを意味するのではないだろうか。

### 学術情報発信の担い手はだれか？

学術情報発信の担い手は、これまで、大学では大学出版部だけであった。しかし学術情報の多様化に応じて、情報発信の担い手も多様化した。

第一のグループは、研究者自身である。どのくらいの数かは把握しがたいが(日本では研究者総数の一割といわれる)、かなり多くの研究者が自分で立ち上げたウェブサイトに著書、論文、研究報告などを載せている。

第二は、図書館、情報センターなどが、大学に置かれたサーバーに学術情報を集積し、発表することである。二〇〇三年ごろから「機関リポジトリ」として制度的に学術情報を蓄積し、発信する試みが世界的に展開している。このほか「ACLS 提言」に紹介されているが、大学間研究センター・コンソーシアムなどが、研究資料のデジタル化とその集積、研究成果の公開をしている。

第三は、「報告」また「ACLS 提言」が推進し、擁護しようとしているオープンアクセス方式の学術情報発信である。

オープンアクセス方式ジャーナルは、出版費用を著者あ



るいは大学などが負担し、利用者は無料で学術情報にアクセスできる。研究者が、オープンアクセス方式に期待するようになった状況を次のように説明する。

「特に専門化した分野の研究成果を出版する場合、その成果に関心を持つ人も少なく、その市場価値もかなり少ない。学術的なインパクトから言えばその価値は高い。しかもそのインパクトが明らかになるのに、その研究成果が出版されたあと、数年あるいは数十年掛かる場合もある。大学に基礎をおいた出版部あるいは非営利の学術出版社は、しばしば学問の要求と（出版の）費用回収の要求という対立する要求と格闘することに慣れている（といっても、なかなか出版に踏み切れない）。これらの出版社から出版する可能性がなくなるとすれば、研究者は出版する選択肢がより少なくなり、望んでいる出版をする機会はますます少なくなる。……研究者たちは研究成果を出版できないという問題を解決するひとつのモデルとしてオープンアクセスに期待しているように見える」（p. 10）。

大学出版部は、学術的価値は高いが需要が少ないモノグラフを出版することをめざしてきたが、現在において、研究者の期待にこたえる出版プログラムを提供できなくなっているのである。

これらの新しい学術情報配信システムの登場は、「学術情報へのアクセスの機会を拡げ、費用を削減し、オープンに利用できる」環境をもたらしたが、同時に、「伝統的な

出版機能と競合し、これまで学術出版社が依存してきた（学術情報）選別、評価のモデル、また経済モデルを混乱させる可能性がある」（p. 8）としている。「報告」では、研究者自身による研究成果公開、機関リポジトリ、オープンアクセスを同列に論じているが、筆者には特にオープンアクセスが学術情報流通システムにより大きな影響を与えているのではないかと思われる。

第四の学術情報発信の担い手として現れたのが、エルゼヴィア、シュプリンガー、ワイリーなど大手の商業学術出版社である。これらの出版社は市場需要の乏しいモノグラフ出版は手がけず、学術ジャーナルの発行を中心としていた。それでモノグラフを出版する大学出版社と競合することなく、市場を分け合っていた。商業出版社は、その事業規模と資本力により、一九九〇年前半には学術ジャーナルの電子化に取り組み始めた。そして利用者からコンテンツの大きな集積が求められるようになると学術書のデジタル化に取り組みはじめたのである。

「報告」によれば、二〇〇七年ジョン・ワイリーが数百点の学術書をオンラインで発行する、エルゼヴィアが四〇〇〇点、シュプリンガーが一五〇〇〇点を発行することを決定した。その他ランダムハウス、ハーパーコリンズもコンテンツをオンラインで販売することを、著名であるが規模の小さな大学出版部に呼びかけている。「これらの商業出版社が学術出版に進出することにより、大学を基盤に置

く出版社のとてつもなく大きな競争相手があらわれた」(p. 9)。学術出版市場は、もともとそれぞれの学問分野によって細分化された性質をもっているが、それにも関わらず、大手商業出版社は学術的評価の高いジャーナルの発行で成功した経験をもつて、限られた需要しかないが、質の高い学術情報を集積し、自分たちのサイトの学術的価値を高めるために、学術書のオンライン配信に取り組みはじめたのである。

事業規模において、資本金、マーケティング力において競争にもならない相手が現れたことが、この「報告」の提言の背景にある。つまり、商業出版社が資本金に物を言わせて学術コンテンツを独占することに対抗するために、大学は、学術情報発信に力を入れ、大学出版部、図書館などが共同でコンテンツを集積し、発信するプラットフォームを構築すべきであるという提言である。

提言では、大学間を横断する規模のモデルまた共同モデルとして第三者機関によるプラットフォームをつくることが提案されている。デジタル時代には個々の大学出版部がもっている資金と資源では商業出版社に規模の上で対抗できない、だから共同が必要であるというのである。その共同の例として一九九〇年代半ばから、ジョンズ・ホプキンズ大学出版局と図書館が共同で、大学出版部、学協会(現在、六〇)が発行する学術ジャーナル(現在、三〇〇)のデジタル化と発信に取り組んできた Project Muse<sup>3)</sup>などが、

評価され、紹介されている(p. 26)。しかし、出版部と図書館という学術情報をめぐって別々の文化をもった組織が共同することで、それぞれの能力を生かせるかは、この「報告」では明確ではない。むしろ、共同の組織が実現したとき、大学出版部が果たしてきた重要な機能はどうなるのが問題である。たとえば、大学出版部は大学の一部局であるが、学術情報の選定、評価においては、大学の他の組織、部局とは独立した独自の専門性をもってきた。それゆえ、大学出版部で原稿の厳しい審査をし(採択率二〇%、ダールトン、前傾論文)出版したモノグラフが終身在職権を得るため、あるいは昇任のための第三者評価基準となるのである。

大学出版部は、デジタル時代に学術情報発信の中心でなくなっただけで、出版部が長年培ってきた(一朝一夕には形成できない)、質の高い学術情報を作成し、学問的価値を評価する独自の機能が、デジタル時代にどのように継承され、発展されるかは、大学のブランドを高める学術情報発信をするためにも重要な問題である。

### 学術情報の「制作と発信」の費用はだれが負担するのか？

大学出版のビジネスモデルは、ハウズの次のようなことばに表明されている。「原価が高く、マーケットが狭いことが学術書出版経済の特色であるので、大学出版部の経済にとって補助金は重要な役割を果たしている。大学出版部

は、その原価を下げ、読者を拡大し、収入を増やすすべての可能な方法を試みている」(前掲書)。この「補助金」獲得と「費用回収」(原価を下げ、売上を増加させる)の努力によって市場需要の少ないモノグラフを継続して刊行してきたのである。

しかし、「報告」は、この「費用回収と補助金によるモノグラフの出版というビジネスモデル」が機能しなくなっていることを繰り返し指摘する。「大学出版部ではささやかな補助金と零細な資金に対して減量経営をする一方、費用(原価)の回収と学問的価値のバランスをとる厳しい取り組みをしている。しかしこのような日々は長くは続かない」(p. 10)、「大学出版部は費用回収モデルに縛られている。……(デジタル化への実験)をする予算の余裕がなく、大学管理者が新しい事業に投資する意欲を持つように誘導することもできないという八方ふさがりの中にいる」(p. 19)。

これまでの大学出版部の「補助金・費用回収」モデルに対して、「報告」が提示するのが、学術情報の性質によって幅を持たせているがサイトライセンス・モデルとオープンアクセス・モデルなのである(p. 10, 30)。

サイトライセンス・モデルはこれまで大学出版部など出版社が経営の基盤としてきた定価設定方法を変えようとする意味する。大学出版部では、損益分岐点を考慮しながら、原価を部数で割り、個々の出版物の定価を設定してきた。

損益分岐点を下回る金額は補助金などによって補填するのである。この「費用回収・補助金」モデルによって継続した出版活動が可能であった。これに対してサイトライセンス・モデルは、コンテンツの集積されたサイトへアクセスできるライセンス料であり、多くは大学などの機関に販売する。商業出版社が多くのコンテンツの集積規模を競い合うのは、多くの利用者がアクセスする魅力あるサイトにし、ライセンス料を獲得するためである。

一方でデジタル時代に大学が学術情報流通システムをつくり維持することには大きな資金が必要となる。特にシステム立ち上げの初期費用だけでなく、情報の訂正、最新の情報への更新、リンク切れのチェック(「報告」では繰り返し更新されるコンテンツをdynamic contentと呼ぶ)などサイトの維持には予想以上の費用が掛かるといわれている。デジタルによる学術情報流通サイト立ち上げの初期費用と維持費用は、だれが支払うのか。

サイトライセンス料による費用回収であろうか。サイトライセンス・モデルはどのような費用回収モデルとなるのか。その場合の損益分岐点はどこにあるのか。

あるいは、大学から、大学出版部に支給されている以上の補助金が継続して投資されるのか。「ACLS提言」が提案するように政府や財団に資金提供を呼びかけるのか。いずれの場合も、永続的な安定したシステムが構築される見通しはもてない。

特に「報告」が提言している「市場の需要が少ない、しかし重要な学問的成果を低コストで発信する」しかも「新しい定価設定でアクセスできる」(p. 30) ことを目指すとすれば、発生する費用はだれが支払うのか、この報告からは明確に見えない。

さらに大きな問題は、オープンアクセスが学術情報流通の主流になっていくだろうということである。アメリカ大出版部協会が二〇〇七年二月に出した「オープンアクセスに関する声明」では、オープンアクセスが、学術情報流通の機能の点では大学出版部の目指す方向と矛盾しないと表明しつつ、一方では著作権の侵害の問題と学術情報流通システム全体への影響から、現在の大学出版のビジネスモデルを破壊することへの懸念を表明している。しかし大学出版のビジネスモデルにとどまらず、サイトライセンス方式などコンテンツに価格を付けて販売するビジネスモデルをも破壊するのではないか(「声明」では商業出版社に対する直接的影響を予想している)。情報に価格を付けられるかという本質的問題がそこにあるからである。

マーク・ポスターは情報に価格を付けて販売することについて『情報様式論』の中で次のような議論をしている。

資本主義経済の下では、資源が稀少であることにより、商品は価格を上げることができる。しかし情報はゆたかにあり、しかも安いのである。その場合、情報の流れを制限することにより、情報の価値を上げることになる。書籍を

例に挙げれば、これまで書籍の生産者と消費者は生産過程で分離されてきた。消費者は複雑な生産過程を経て製造される書籍を自分で製造することなど考えなかった。「消費者は書籍の製造に対して価格を支払っていたのであって、公共図書館でただで利用できるその中の情報には支払わな。……情報はそれが出荷される『パッケージ』と分離できないものであり、この『パッケージ』に価格票がついている」のである。しかし、デジタル時代に、パッケージとしての「紙の本」とコンテンツは分離してしまった。消費者は容易にコンテンツを生産、あるいは再生産することができるようになった。しかも情報の流れの制限をむしろ取り払うことをめざすオープンアクセス方式では情報としてのコンテンツが無料で配信される。情報が無料であることが常態となったときに、改めてコンテンツに価格は付けられるだろうか。

デジタル時代に大学出版部はどのような役割を果たせるのか。かつて大学出版部が大きく飛躍した時代は、一九三〇年代にアメリカで「知の爆発」が起きたときであった。いま「デジタル情報の爆発」の中でアメリカの大学出版部は、その基盤を揺るがされている。

アメリカ型大学出版モデルは、ゲートキーパー機能によって選ばれた原稿を編集機能によって価値付与し、厳密な定価設定とマーケティング機能によって販売されるという

厳しい出版過程を経ることにより学術的価値の高いモノグラフを発行してきた。またモノグラフを販売したときの資金回収と計画損失を見越した経営によって継続的に出版活動をしてきた。その大学出版モデルが機能しなくなったデジタル時代には、どのようにして大学のブランドを高めるような価値のある学術情報が生み出されるのか。

「報告」は「いくつかの大学出版部は、学術情報発信に引き続きリーダーシップをとる」と予想する。しかし、無料の学術情報が大量に流通する中で、アメリカ型大学出版モデルはどこにゆくのか、行く先はまだ見えなない。

- (一) Laura Brown, Rebecca Griffiths, Matthew Rascoff, University Publishing in a Digital Age: Ithaka Report, July 23, 2007, <http://www.ithaka.org/strategic-services/university-publishing> の報告で「publishingを出版という概念から抜けて「知のロンドニケーション」と普及」と定義している。つまりデジタル時代の publishingを印刷メディアによる「出版」と区別している。その「University publishingを敢えて「大学の学術情報発信」と訳した。
- (二) 文献は数多いので、下記に挙げる二点に絞る。それぞれ重要な文献を紹介しよう。John B. Thompson, *Books in the Digital Age: The Transformation of Academic and Higher Education Publishing in Britain and the United States*, Polity, 2005. Margaret Steig Dalton, “A System Destabilized: Scholarly Books Today” *Journal of Scholarly Publishing*, 37-4, University of Toronto Press, 2006
- (三) 「報告」にも紹介されているアメリカ学術協会協議会の提言 Our Cultural Commonwealth: The Report of the American Council of Learned Societies Commission on Cyberinfrastructure

- for the Humanities and Social Sciences, 2006, pp. 12など参照。以下「ACLS 提言」。<http://www.acls.org/cyberinfrastructure/OurCulturalCommonwealth.pdf>
- (4) AAVP Statement on Open Access, February 2007, pp. 4-5, <http://aaupnet.org/aboutup/issues/oa/statement.pdf>
- (5) Mark Poster, *The Mode of Information: Poststructuralism and Social Context*, University of Chicago Press, 1990, p. 73 (室井尚ほか「情報様式論」岩波書店 一九九一年 一六六頁参照。)

# デジタル・コンテンツと書物

福嶋 聡

(ジュンク堂書店大阪本店店長)

この原稿もそうであるが、パーソナルコンピュータの普及のおかげで、文章を書く、その文章をしかるべき場所に送るという作業は、随分と楽になった。その前身であるワープロの出現がなければ、恥ずかしながらもの凄い悪筆であるほうが、書物を上梓することなど不可能であったろうと思う。そんな個人的なことを打つ棄つても、コンピュータの出現が書物の編集現場、販売現場で大きな省力化を果たしたことは事実だと思ふ。

その一方で、コンピュータの出現、それに続くインターネットの出現、今では「WEB 2.0」と呼ばれる状況が書物出版・販売の存続を脅かしていることも事実である。

グーグル・ブック検索について、永江朗は次のように言う。『出版社にとって、ブック検索に参加することにはメリットとデメリットが考えられる。メリットは販売促進である。検索によってその本の存在がユーザーに知られ、購

買につながるかもしれない。グーグルが本を販売するわけではないが、検索結果の画面からネット書店等にリンクが張られているし、実際に店舗を持つリアル書店の場所も教えてくれる。しかし、ネットでの閲覧だけで用が済んでしまえば、本は売れないかもしれない。それがデメリットだ。』<sup>①</sup>

出版・書店業界にとってのそうした両義性<sup>②</sup>を尻目に、グーグルやアマゾン<sup>③</sup>は書物のコンテンツのデジタル化を着々と進めている。

一方で、「出版物＝紙ではない」と、小学館ネット・メディア・センターの岩本敏は、インターネットやケータイ分野への進出を必至と見る。『我われが培ってきたものは、紙に印刷することではなく、出版するコンテンツを創ること。つまり編集するということだ。それがお金になる価値を持つ。だから紙であろうとデジタルであろうと、パッケージは何でもいい。』<sup>④</sup>

出版物のデジタル化、出版物販売のインターネット化、これら二つの（混同されることが多いが実は全く別物である）WEB 2.0<sup>①</sup>は必至であり、書き手・読み手両者にとって歓迎すべき進化なのであるか。

一見話がそれるようだが、先に引用した永江の文章も含まれる『論座』二〇〇七年二月号の「ネット時代の知財戦略」という特集が、参考になる。そこで「著作権」の概念にしたいが問い直される理由は、コンテンツのデジタル化によって、コンテンツのコピーが（技術的に）余りに容易になり、（倫理的に）余りに安易になったことだからである<sup>②</sup>。その問い直しは、インターネット時代において書物とは何か、という問いに否応なくつながるのだ。

寄稿している山形浩生（評論家、翻訳家）、白田秀彰（法政大学社会学部准教授）の文章を読むと、「著作権」が保護しているのは、創作者ではなく出版社であるということに気付かされる。

「著作権」という概念の根拠となる「創作者の利益」は、白田によれば次のようになる。

〃 a 言論表現の自由が可能な限り保障されること——創作活動にとって損失や責任を負う可能性が小さければ創作に着手する意欲が減退しにくいだろう。 b 作品が可能な限り多くの人のもとに届けられること——作品が自由に広く多くの人に届いて初めて、創作者は、公平な評価や経済的利益を受けられる<sup>③</sup>。

同じ事を山形浩生が言うところ、<sup>④</sup> 1 なんでもいいからとにかく創作されるものの幅と量が増えること、<sup>⑤</sup> 2 それをなるべく広く享受・利用されやすくなること<sup>⑥</sup>となる。

すなわち「創作者の利益」とは、自らの作品が発表され、広く流布されることなのだ。経済的な利益は二の次、あるいは付きたりなのである。だから、「著作権」は創作者の経済的利益あるいは生活を保障するものではなく、作品が享受されるのを保証するものではない。白田は、創作者が高い評価や豊かな経済的利益を受けられる保障はない。作品を評価し、創作者に人格的経済的報酬を与える動機は、私たちの自由意思に依存しているのだから、それを法律や制度によって強制することはできない<sup>⑦</sup>。と言い、山形は、〃何か作品を作ったら、それをネットで公開するのはそんなにむずかしいことじゃない。もちろんネットにあげれば必ず見てもらえるというものではない<sup>⑧</sup>。と言う。

「著作権」は「作品が可能な限り多くの人のもとに届けられること」を保証するために、出版活動を、言い換えれば出版社を守るものなのだ。出版活動をする事業者には、優れた創作者や作品を発見する費用、作品を洗練し編集する費用、そして複製原版を作成する費用が、複製物を作成する全段階の大きな費用として生じ<sup>⑨</sup>、排他的独占権は、出版社たちの業界秩序を維持する必要から生じたものである<sup>⑩</sup>。

こうした「必要」は、出版という営為が「作品が自由に広く多くの人に届く」ために不可欠であればこそ、成り立つ。インターネット時代の今、その前提は崩れ去っている。山形は、本来創作者を助ける目的でつくられた「著作権」が創作の邪魔になっているとさえ言う。クリエーターたちはますます窮屈な状況に追い込まれている。映画やビデオの作家は、街角の風景を写すたびに各種商標やロゴを避けなきゃならない（欧米のテレビでよくTシャツや帽子にモザイクがかかっている間抜けな状況はこのせいだ）<sup>10</sup>。

では、「著作権」は無用の長物なのか？ 言い換えれば、「出版社たちの業界秩序を維持する必要」は無いのか？ その問いは、インターネット時代が到来した今、書物という媒体の存在理由への問いでもある。

学術雑誌などは、既に基づいぶん前からデジタル化されている<sup>11</sup>。デジタル化した方が、伝播速度は速いし、引用も検索も、書物に比べて著しく容易である。だが、容易さという光は、陰も生む。（文系・理系問わず）大学生・大学院生の多くが、論文を「コピペ」で済ませている、という批判もよく聞く。彼らにとっては、必要な情報さえ手に入ればいいのであって、そのために何冊もの書物にあたるというのがまだるっこしいのかもしれない。だが、その「まだるっこしさ」にこそ大切なものがあるのではないか。デジタル・コンテンツの検索では出会えない、思ってもみなかった視点を邂逅できるのではないか。（その「まだるっこ

しさ」は、キーワードですぐに必要な本に行き着くネット書店に比べた時のリアル書店の「まだるっこしさ」にも通じる。すわなち、リアル書店もまた「思ってもみなかった視点を邂逅できる」という属性を共有すると思う。）

「本は、買って下さい。」ジュンク堂書店池袋本店の「作家書店」の企画を引き受けてくださった「うえの・ちずこ書店」店長上野千鶴子氏は、オープニングセレモニーで、集まった読者に向かって、力を込めてこう言った。「本を買って自分のものになれば、書き込みができるからです。読んで、どんな本に書き込みをして下さい。」

本の価値は、——それが学問であれ虚構であれ——読んではじめて、読書という体験を通じてのみ現実化する。本への書き込みは、その体験の「痕跡」である。その「痕跡」は、読者にとって一種の外部記憶装置である。そう、書物とはその書物が誕生する以前に生まれたコンテンツの記憶装置であるとともに、「読書体験」そのものの記憶装置でもあり得るのだ。

一方、デジタル化されたコンテンツにも、弱点はある。外部環境依存性の強さと書き換え・伝播の容易さである。

前者は、デジタル化されたコンテンツには、コンピュータ等のハードと共にそれを読み込むためのアプリケーションソフトが必要であることだ。双方ともに進化・淘汰が繰り返され、一定期間を経ればバージョンアップは当たり前である。バージョンアップのせいで読み込みなくなるこ



もある。現にはくは最近、Adobe Readerのバージョンアップのおかげで、タイムサービスで買ったデジタルカメラの使用説明書が読み込めなくて困った。

また、そもそもコンピュータの立ち上げには何らかの電源が必要だ。普段何気なく接しているデジタル・コンテンツは多くの環境に支えられているのだ。一方、書物に絶対不可欠なのは、強いて言えば「光」くらいである。

後者の書き換え・伝播の容易さは、本来デジタル・コンテンツの強みでもあるのだが、逆にそこが脆弱性という弱点にもなってしまうのだ。さまざまなプロテクトの技術があるとはいえ、基本的にはデジタル・コンテンツは容易に書き換えが可能で、表面的にはその痕跡が残らない。例えば『六法全書』が無くなり、すべての法律がデジタル・コンテンツだけになってしまった状態を想像してみよう。法廷において、判断基準となるものは、その度にノート型パソコンか何かで呼び出されるデジタル・コンテンツなのだろうか。必要に応じて、Power Pointでスクリーンに映し出したり、そのハードコピーを配布するのか？ その短い作業の過程でも、コンテンツの書き換えは容易であろう。

直観的に、デジタル・コンテンツは、どうにも「典拠」にはなじまないと感じるのだ。

モーセは、イスラエルの民に神の命じることを伝える際、「私があたがたに命じることばに、つけ加えてはな

らない。また、減らしてはならない。」と言った。そして『聖書』は少なくとも約二〇〇〇年の長きにわたるベストセラーであり、キリスト教圏の何よりの「典拠」であり続けている。英語圏では「The Book」と言えば『聖書』のことである。

先に引用した白田秀彰は、現代のメディア企業の機能を、次のように整理する。①世に周知すべき価値のある創作者や作品の発見、②創作者の育成、作品の洗練整理、③複製物作成販売のための事業計画と資金調達、④世に周知するのに十分な数の複製物の作成販売、⑤流通経路の整備維持、⑥告知宣伝、⑦創作者の管理監督。

1、6は、いわゆるマーケティングや広告宣伝事業であり、2、7は、いわゆるタレントプロダクション事業であり、③は資金調達やプロジェクト管理事業である。コンテンツのデジタル化で直ちに代替されるのは④だけであり、残りの機能、一言でいえばプロデューサーとしての役割は、依然重要なものであるはずだ。生き残る書物に不可欠なのは、自らが担うコンテンツに信頼を抱かせる「ブランド性」なのである。デジタル・コンテンツに勝る「典拠」性こそ、書物が生き残っていくための「砦」だと思う。

それゆえに、いつ消え失せても困らないような書物の粗製乱造は、出版業界にとって、自らの存在理由の否定に他ならないのである。

- (1) 永江朗「グーグル・ブック検索は脅威か新たな可能性か」(『論座』二〇〇七年二月号八二頁)。
- (2) 『新文化』二七二〇号。
- (3) 「著作権」とは、そもそも「copyright」の訳語である。
- (4) 白田秀彰「権利を強化しても誰も幸福にならない」(『論座』二〇〇七年二月号九七頁)。
- (5) 山形浩生「創作活動の民主化と著作権」(『論座』二〇〇七年一月号七九頁)。
- (6) 白田前掲論文区九三頁。
- (7) 山形前掲論文七八頁。
- (8) 白田前掲論文九四頁。
- (9) 白田前掲論文九四頁。
- (10) 山形前掲論文八一頁。
- (11) 湯浅俊彦「デジタル時代の出版メディア」(『時間目 学術出版の世界は激変している』(ポット出版 二〇〇〇年)。
- (12) 『申命記』四・二一。
- (13) 白田前掲論文九八頁。

# デジタル化を展開中の大学図書館

富田健市  
(筑波大学附属図書館)

## はじめに

これまで、大学図書館の主な役割とされてきたものは研究支援と教育支援であり、学術情報と利用者とを結び付けることにあった。したがって、デジタル化の目標となってきたのも、両者を結び付けるために行う、学術情報を提供するための手段の部分であり、目録情報をデジタル化してネットワーク上に公開するOPACが代表的なものであった。

しかし、現在多くの大学図書館で展開中のデジタル化は、これまでとは異なる部分における取組みの下に行われている。この異なる取組みは、大きく二つに分けることができる。一つは、学術情報そのものがデジタル化されたことへの対応であり、もう一つは、法人化後に大学の新たな役割として取り上げられている社会貢献の一環としての、大学

の研究成果や蔵書の内容を自らデジタル化し広く社会一般に情報発信することへの取組みである。これらは、一〇年ほど前の「電子図書館」においても課題となっていた事項であったが、当時は学術コミュニケーションの主流がまだ紙媒体であったことや著作権処理の問題が未解決であった等の理由により、十分な成果をあげることができなかったものである。

## 一 学術情報のデジタル化への対応

インターネットの普及に伴い、デジタル化された学術情報が学術コミュニケーションの主流となり、教育・研究の上で不可欠のものとなっている。中でも現在その大きな部分を占めているのは、学術雑誌をデジタル化した電子ジャーナルである。学術分野によって温度差はあるものの、すでに多くの分野において電子ジャーナルは必須のものとな

っており、いかに必要とする大量の電子ジャーナルを研究者に提供できるかが、大学図書館に求められている。しかし電子ジャーナルの拡大は、一方で購入経費の増大をもたらし、図書館経営を圧迫しているのも事実である。

これには、電子ジャーナル化された学術雑誌を扱う出版社が有力な数社に集中しており、これらの出版社が自社で扱う数百ないし千以上のタイトルをパッケージ化して販売していることの影響が大きい。パッケージ化されると、基本的には従来購入していたタイトルの総額相当の購読規模を維持していれば、パッケージに含まれているこれまで購入していなかったものを含む全てのタイトルについても利用することができるので、費用対効果は大きくなる。しかし、購読規模の維持にあたっては、原価ベースでの毎年の値上がり回避のものとなっており、これが経費増大に直結している。毎年の値上がりについては、強く改善を求めているものの、出版社側からは世界中の研究者から投稿される論文の急増を主な理由として、満足すべき回答を得ることはできないのが現状である。経費縮減が求められる中、図書館全体の経費も節減していく必要があり、電子ジャーナル部分が増加すればそれ以外の経費を縮小せざるをえないこととなる。

しかし、さらに値上げが続けば、他の経費の縮小自体にも限界がくることは明白である。このため、電子ジャーナルについては図書館経費の枠ではなく、大学全体の経費で

維持する大学が増えてきているが、値上げの構造には変化がなく、抜本的な解決策が待たれている状態にある。そのような中であって、解決策のひとつとして提案されているのが、後ほど触れるオープンアクセス運動であるが、現状では残念ながら十分な成果をあげるには至っていない。

## 二 電子Book導入の現状と今後

雑誌をデジタル化した電子ジャーナルと比較して、圖書を電子化した電子Book（電子ブックという名称が商品名であるため電子書籍といわれることも多いが、ここではBookとする）の導入は進んでいない。筆者は、平成一六年度から一八年度にかけて、国立大学図書館協会学術情報委員会の小委員会である、デジタルコンテンツ・プロジェクトに事務局として関わり、電子Bookと機関リポジトリの二つについて調査研究を行ってきた。結果として、後述する機関リポジトリがその三年間で拡大定着したといえるのに対し、電子Bookについては導入機関数、導入タイトル数ともにわずかな増加に止まっている。プロジェクトで実施したアンケートによると、導入が進まない理由としては「価格が高い」が最も多く、「日本語のものが少ない」、「購読希望がない」と続いている。電子ジャーナル経費の増大の中で電子Bookにまで対応できない図書館側の事情と、電子ジャーナルに比較して研究者側の需要が喚起されていないことが導入の遅れを招いているといえる。研究者の

需要が少ない理由としては、電子化された図書のタイトルが質量ともに十分なものでなく利用したいものが少ないことその他に、電子媒体の「速報性」「検索」といった利便性が、紙媒体の「読みやすさ」「価格」等の利点を上回るに至っていないことが考えられる。その点で、事典等のレファレンスツールは、電子媒体の利便性を活かしやすい特性を持ち、値段も冊子と比較してさほど高くなく、またある程度タイトルも揃っていることから、他の種類よりは比較的導入が進んでいる。ただし、このような状況が今後も続くかどうかは予断を許さない。今年度になってから大手の電子Bookプラットフォームへの日本語学術図書登載が開始されるなど、普及に向けた動きもみられるようになってきている。さらに、Google や Microsoft で展開されている大規模な図書のスキヤニング事業においても、図書館蔵書電子化部門に日本から慶應義塾大学が参加するなど、出版社主導ではない電子化の動きが大きくなってきている。今後は、有料無料に関係なく、これらネットワーク上の電子Bookが増大していくことは確実であり、「読みやすさ」についてもAmazon から電子Book 端末が発売されるなどの動きがあるため、研究者の需要が喚起される可能性があり、図書館としても準備をしておく必要がある。

### 三 情報発信のためのデジタル化への対応

研究機関が自機関に所属する研究者の研究成果をデジタ

ル化して蓄積しインターネット上で公開する機関リポジトリは、当初は学術コミュニティの主流を大手出版社の手から研究者自身に取り戻すことを目的とするオープンアクセスの手段として欧米で登場した。したがって、その際には蓄積すべき研究成果は学術雑誌掲載論文が中心であると考えられていた。しかし、現在日本で開設されている機関リポジトリに収録されているコンテンツの実態は、紀要論文や貴重書画像データが多くなっており、学術雑誌掲載論文は必ずしも主流とはいえない状況となっている。

平成一九年一月現在、国立情報学研究所の機関リポジトリ一覧のページには六七件の機関リポジトリが収録されており、今後増加が見込まれている。また、世界では英国にある機関リポジトリのディレクトリである「OpenDOAR」への登録数が千件を超えるなど、数の面では順調に発展しているといえる。しかし、同年三月に同研究所から発表された「次世代学術コンテンツ基盤共同構築事業中間まとめ」によれば、日本の機関リポジトリに収録されているコンテンツの四六・二%が紀要論文であり、次いで三六・五%が貴重書画像データ等の含まれる「それ以外」となっており、当初期待された雑誌論文は五・九%にすぎない。

これは、現在の日本において主な部分をしめる大学の機関リポジトリの性格がオープンアクセスへの対応手段としての面ではなく、大学の研究成果を一般社会へ発信すると

いう社会貢献の一環としての面が強いためであると考えられる。大学の研究成果としては、学術雑誌掲載論文ばかりではなく、紀要論文や科研費の報告書、学位論文も当然含まれるためである。さらに、社会貢献という面からは研究成果ばかりではなく、貴重書などの蔵書をデジタル化して公開する機関も増えている。ただし、デジタル化した蔵書については、機関リポジトリに収録するか別のデジタルアーカイブとするかについて各機関で対応が分かれている。筑波大学ではすでに電子図書館として、紀要論文・学位論文・貴重書画像データ等を蓄積していたが、貴重書画像データについては機関リポジトリに収録せず、別の枠組みで対応することとした。機関リポジトリに「研究成果」のみを収録することとしたのは、学内の研究者に収録への協力を求める際に対象を限定した方が説明しやすく、かつ理解が得られると判断したためである。

ただし、著作権の一部が商業出版社や学会等に移動している場合には、機関リポジトリから公開しようとする著作権所有者の著作権ポリシーにより制限がかかることがある。著作権ポリシーには、一切公開を許さない場合や、刊行されたままの形では公表できないが原稿段階のものは大丈夫な場合等がある。海外では公表している出版社が多いが、日本の学術雑誌の刊行元の大部分を占める学会においては、どのような形で機関リポジトリへ対応するかを決めていないところがまだ多く、現在も交渉を続けているところ

である。とはいえ、日本でも公開を許諾する学会等も増加しており、英文学術雑誌発表分も含めて全国規模でみると、デジタル化された「研究成果」の蓄積は着々と進んでいる。

### おわりに

目録データだけではなく、提供する学術情報そのものがデジタル化されてインターネットで公開されているということは、その部分については電子図書館が実現しているといえる。これまでの電子図書館は個別開発システムの色合いが濃かったが、電子ジャーナルや電子Bookの普及と、オープンアクセスの動きと情報発信・社会貢献に対する要求が追い風となり、標準化の進んだ機関リポジトリが登場してきたことにより、特定のプラットフォームに限定されないものになりつつある。このため、現在大学図書館で展開中のデジタル化の動きは、これまでと違って個別の大学単位のものではなく、多くの大学によって歩調を合わせて進行していることから、着実に充実したものとなっているのが特徴といえる。

デジタル化の流れは、今後も加速していくことが予測され、研究支援という機能を果たすためにも、大学図書館では積極的な取組みを続ける必要がある。

# 知のコミュニケーションの核としての共同——学術情報リポジトリと大学出版会（京都大学の試み）

鈴木哲也（京都大学学術出版会）

ギルマンの卓見は、引き継がれているか？

われわれ大学出版人がバイブルとして読むべき一冊、G・R・ホウズの『大学出版部——科学の発展のために』<sup>1)</sup>は、ジョンズ・ホプキンス大学出版部の設立に関わる、印象的なエピソードから始まっている。

ジョンズ・ホプキンスといえば、今や医学生理学、国際関係分野では他の追随を許さない研究機関であり、連邦政府研究費の獲得額では全米一と言われる世界の最高学府である。けれども当然のことながら、一八七六年の創立時にあつては、新大陸の、西欧学問世界から見れば辺境の一新設大学にすぎなかった。そして、その初代学長D・C・ギルマンは、「しっかりとした大学には第三の勢力がある」といふことに気づいたのだという。すなわち、教育を担う勢力（教授陣）と研究を担う勢力（教授陣と図書館）、そして発表

を担う勢力（教授陣と図書館と大学出版部）である。一九世紀の時点で、ヨーロッパの大学出版部はすでに四〇〇年の歴史を持っていて、その代表であるオックスフォードやケンブリッジの大学出版部は、まさしく、知のコミュニケーションの核であった。ギルマンは大学出版部設立に尽力し、その結果誕生したジョンズ・ホプキンス大学出版部は、米国最古の大学出版部の一つである。

その後のジョンズ・ホプキンス大の姿を見れば、ギルマンが卓見の持ち主であったことには誰も異論がなからう。以来一五〇年、ずいぶん様変わりしたとはいえ、研究者（による成果）↓学術出版（を通した公開）↓図書館（による集積と系統化された開示）↓研究者による受容と新しい創造、という「知のコミュニケーション」の基本的骨格は、依然として揺るいでいない……にもかかわらず、われわれの現場では、はたしてその三者の共同が有効になされ

ているのだろうか？ 少々出だしが長くなったが、この自問が、拙稿を書くに至った、そもそもこの契機である。

### 機関リポジトリと既存の学術出版パラダイム

機関リポジトリそれ自体の意義と問題点を本格的に検討するのは拙稿の目的ではないが、差し当たつての議論のために機関リポジトリとは何か、R・クローに從つて最低限定義しておこう。すなわち機関リポジトリとは、研究機関が、その構成員によつて創造された学術的生産物をデジタル・アーカイブし、機関内外のエンド・ユーザーが障壁なくアクセスできるようにしたシステムである<sup>32</sup>。

京都大学のデジタル・アーカイブに関連して、図書館と大学出版部（京都大学学術出版会、以下当会）の最初の懇談が行われたのは、一九九七年のことである。その場では、機関リポジトリという語は使われなかつたと記憶するが、印象的だったのは、「なべて出版社はオープン・アクセスに非協力的で、非常に残念だ」という言葉で、具体例として、大学出版部も含めたいくつかの大手学術版元の名が挙がつていた。

確かに、学術成果をインターネット上で無償公開し、自由利用できるようにするというオープン・アクセスの思潮は、現在の学術出版モデルを破壊する——という警戒心は、われわれ出版人の間に根強い。いや、そもそもそうした思潮の背景には、（主として欧米の版元が支配する）学

術雑誌の高騰への不満、すなわち「学術出版が、知的成果物を独占的に支配している」という強い批判がある<sup>33</sup>のだから、その対立は当然とも言える。しかし、ギルマンの立つた、いわば原点の地平から見たとき、この対立は本源的な解決不能なものなのだろうか？

学術雑誌の価格が急騰しているのは事実である。また研究者の側から見れば、雑誌のみならず単行本にあつても、価格すなわち商業的価値を維持するという名目で、学術的な価値や信頼性が過剰に審査され、論文を出版システムに乗せるのが容易でない、という不満は強い。しかし、視点を変えて見れば、大学院重点化やそれに伴う研究機関の競争状況、その背景にある国際的な科学技術競争の結果、そもそも学術研究の量自体が著しく増加し、その量が、既存の学術出版モデルの容量をすでに遙かに超えているのは明らかなのだ。「独占的支配」というよりは、印刷技術と書籍市場システムに強く制約された学術出版は、今日の学術コミュニケーション（知のコミュニケーション）のごく一部しか担えない、というのが事実なのである。むしろ問題とすべきは、その「担い方」だろう。

箕輪成男氏が指摘するように、学術出版は、元来、知のコミュニケーションにおける権威、すなわち「人を納得させるだけの信頼性」を確保する装置として誕生し機能してきた<sup>34</sup>。ノートの隅に書き付けられた研究メモから、論文章稿、雑誌掲載論文から単行本まで、学術情報は様々にある



が、学術書とは、公平で客観的な査読・評価を受け、雑誌論文にはない領域的な広がりを持ち、そして研究・教育市場において経済的に成立する程度に広く受容される学術情報結晶である。学術雑誌でいえば、右の条件に加え、領域的な広がりには多少犠牲にしつつも、より緻密な方法とデータによって信頼性を高めたもの、あるいは速報性を高めたもの、と言えようか。もちろん、ここで言うのは理想的な姿だが、要するに「出版物」とは数多の条件・関門を経たものということであり、それ以上でもそれ以下でもない。

逆に言えば、そうした条件を付されない多くの学術情報が存在し、しかもそれぞれに価値あるものなのだ。物事を歪めているのは、本来、数多の学術情報の一部しか担っていない（あるいは担うべきでない）学術出版が、不当に大きく振る舞っている（あるいは振る舞えるようになっていく）からなのである。なぜそうなってしまうのか、少々の乱暴はお許し頂いて、要因を羅列してみよう。

まず指摘せねばならないのは、学問の競争状況、とりわけ研究機関の競争状況の中で、「publish or perish」の風潮が過剰に席巻していることだ。この句を「論文か死か」と訳せば研究者個人レベルの話だが、研究機関レベルの話となると「出版か死か」と訳せる。COEに採択されたが、その成果をとにかく出版しなければ評価が下がる、という悲痛な依頼は、われわれのもとに毎日のように寄せられる。しかし、その全てに応えていたら、決して誇張でなく、こ

の国は「学術書」という名の紙ゴミの山になるだろう。何度か言うように、学術成果は数多ある。とりあえず紀要に掲載すれば良いものか、少し加工してWebサイトに上げてみようか、頑張つて雑誌に投稿してみようか、はたまた本として編んでみるか、といった検討を一つ一つ行うことなしに、安直に「出版」を求める風潮を研究現場の側から改めることが必要ではなからうか。

もちろん、こうした避けがたい競争状況を無批判に利用しようとする「学術出版」の側の問題もある。世界中の大学図書館を苦しめている学術雑誌の高騰も、その一側面として見る事ができる。どんな状況になろうとも、「発表と受容のサイクル」は無くならない。ならばいくら高くても買うだろうという、弱みにつけ込んだ発想は、出版ビジネスの中に根深くある。もちろん、信頼性を高めるための査読・編集・製造のシステムにはコストがかかる。それにしても、七年間で八倍とか一〇倍などという価格上昇が許されて良いものだろうか。

こうした事例は極端なものだとしても、わたし自身猛省すべきことだが、出版の現場では、市場性・経済性に過度に拘束されて物事を評価してしまう、というのは日常的な出来事だ。否、拘束されてというより、工夫がないと言ふべきか。どのようにアレンジすれば出版が可能なのか、頭をひねること無しに、多くの原稿が棄てられている。そしてこれが、三つ目の問題だ。すなわち、出版社（者）自体

が、数多の学術情報の中で、雑誌や本がどのような機能を果たすべきか、こたわること無しに、増大する学術情報に呆然とただ手をこまねいて情報を垂れ流すのみになってはいないか、ということである。インターネットを軸に新しい発表メディアが次々に登場し、メディア間の競争に晒されているにもかかわらず、既存の学術出版システムは、自己点検なしに、その既得した世界に安住している。

もう一つ、紙幅の関係でほんの僅かしか触れないけれど、この三〇年余りの「教育改革」、なかでも「ゆとり教育」とその反動としての初等中等教育の競争化、そして大学院重点化がもたらした、大学（および大学院）教育現場の変化は、いっそう工夫された学術書を求めている。しかし、それにわれわれがきちんと応えられているかと言えば、正直お寒い限りだ。

十分な査読と編集なしに、研究者・機関から寄せられる原稿を、右から左へと「本」として「雑誌」として刊行していれば、当然の如く学術出版の信頼性は損なわれ、価値を失い、その分、研究者・図書館の「不当感」は強まる。実は、こうした負のスパイラルが、問題を厄介にしているのではなからうか？

### 新しい知のコミュニケーションの可能性と課題

いやましに増大する学術情報、新しいメディアの登場、研究・教育状況の変化、そしてそれに対応できずにいる学

術出版……。いや学術出版だけでなく、対応できずにいるのは、既存の知のコミュニケーションシステム全体と云って良いだろう。「機関リポジトリ」は、その問題を解決しようとする、一つの提案である。膨大な情報をとにかく積み、最低限に整理して、まずはいったん公開する。誰かの研究ノート的一片に啓治を受けることだつてあろうから、これは大事なことである。

しかし弱点もある。ピア・レビューを経ていないものに、どれだけの信頼性があるか？ 研究の細分化が進んだ今日、プロの研究者ですら、自分の専門と少し離れた仕事は評価できなくなっている。まして、何の学問的トレーニングを経ていない人々がオープン・アクセス化された情報を安心して受容できるのか？ 医学や健康、美容などの分野では、この問題がとりわけ深刻なものとして指摘されている。そうでなくとも、インパクトのない学術情報の集積にどんな意味があるのかという批判は、機関リポジトリを推進しようとする側にもある。

そこで期待されるのが、信頼性のある、インパクトのある情報を送り出す機能としての出版だ。赤澤久弥氏は、図書館人の立場から、「編集」により価値を付与されたコンテンツを「情報の収集・提供」の装置である機関リポジトリで、社会に発信する「モデルを、大学出版社との共同で実現できないかと提案する」<sup>(6)</sup>。全く同意するものだが、わたしがここで問いたいのは、こうした営みは、学術出版の価

値を高めこそすれ、その商業的側面を破壊しはしない、いやむしろ、新しい知のコミュニケーションモデルの中でチャンスを広げることになるのではなからうか、ということだ。

もちろん、出版の側から言えば、解決すべき問題はまだまだ残る。一つは、著作権処理の問題で、たとえ一度本として刊行されたものであっても、それを電子的にオープンアクセス（著作権上の言葉で言えば、公衆送信）する場合、コンテンツ全てが自動的に公開できるわけではない。例えば引用した図版。多くの場合、引用や掲載（転載）は、その本一度きりの引用に対して許可される。したがって、公衆送信する場合は別途許可を得る必要があるが、記録写真や芸術作品等の場合、費用その他の問題も含め、困難であることも少なくない。そうした場合、当該部分をマスクするなどの工夫は必要だろう。

それ以上に気になるのが、電子公開に際しての費用分担だ。一度紙に印刷されたコンテンツを、例えばPDF形式等にして公開する場合、その費用を誰が負担するのか。特に、容易に電子メディアに置き換えられない古い出版物の場合、画像スキャニングやOCRによる文字情報の読み込みなど、かなりの手間がかかる。もちろん、DTPによって組版された最新のものであっても、電子メディア化するにはそれなりの費用がかかる。それを誰が負担すべきか。原則としては、サービスを提供する側（すなわち機関リポ

ジトリの運営者）の責任だと理解したいが、そうスムーズには合意できないだろう。

細かく言えば他にも指摘できようが、なにより気になるのが、先にも述べたように、出版物の内容をオープン・アクセスとした場合、商売に差し障りないか、という点だ。これに関わってしばしば紹介されるのが、米国のナショナル・アカデミー・プレスの取り組みで、単行本のデジタル版を無料アクセスで提供することで、印刷版の売上を増大させたという。しかし、同社の例も含め、学術出版が何のアイデアもなく、既存モデルを維持したままで、機関リポジトリと共存し発展できるわけではないのは確かだろう。

### なにより共同への一歩を

それにしても、「学術出版は生き残れるか」という問題をいくら頭の中で考えてみても、答えは出まい。「図書館が出来るとその町の書店は潰れるか」という問いが昔からあるが、おそらく潰れた例は少ないのではないか。むしろ、「読む文化」の育成が本の流通を増進する可能性の方が大きいのではないかと考えるがいかがだろうか？ 要するに、知のコミュニケーションの担い手が、それぞれの特性を活かして共同することで、総体としてコミュニケーションを活性化することが必要なのではないか。

現状では、機関リポジトリに組織的に協力している学術出版社（者）はほとんどないと思われる。本稿を準備する

過程で、大学出版部協会に加盟する三一出版部に対してアンケートを行ったが、機関リポジトリに関わって何らかの形で共同している、あるいは今後共同するべく検討している、と回答したのはわずか四校のみであった。理由はあえて問わなかったたのでその背景は様々であるが、「機関の側から何の働きかけもない」と応えたものも少なくなかった。出版部の側だけに問題があるわけでもなさそうた。ギルマンの理念は活かされていない。

実は京都大学では、二〇〇三年頃から、当会と図書館のスタッフによる、懇談・学習の機会を持ってきた。前出の赤澤久弥氏は、そのメンバーの一人だが、いずれの機会も、「生業」としての出版を「知のコミュニケーション」という高みから位置づけ見直すことができる、大変有意義な機会だった。そうした流れの中で、二〇〇七年八月に、図書館の担当セクションから当会に、機関リポジトリへの協力量請がなされ、二〇〇七年二月に両者間の覚書を締結、正式に共同するに至った。

合意事項をかい摘んで言えば、

1 電子メディア化に必要な最低限の費用を図書館が負担した上で、

2 当会が、著者・著作権者の合意が得られた学術書をPDF形式でコンテンツ化して提供する。

3 その際、当会は、著作権保護に関わる様々な処理(図版などへのマスキング、印刷時の透かしなど)を加え

ることができ

る。これに対応するかたちで、当会内部でも、アーカイビングのための基準、特に embargo (刊行後どの程度の期間を経過すればリポジトリに掲載して良いか)に関わる基準を設けている。

一部の著者からは、さつそく、リポジトリに自著を掲載したい旨要望が寄せられているが、むしろ、出版の機能を活かしてインパクトの高いリポジトリを構築するにはどのようなコンテンツが必要か、出版会・図書館の側が主体的に考える必要がある。

差し当たってこの点では、京都大学が授与した学位に関わる単著、COEや特定領域研究など京都大学が中心となつた大型研究の成果、あるいは、研究科や附置研究所等がそれぞれの部局における研究を俯瞰し紹介したような図書等は、掲載コンテンツとして適格的だろう。一方、事典の類(関係する著作権者が多く、事実上、リポジトリにはコンテンツの一部を細切れにしか掲載できない)、史料翻刻を含む研究書や美術史等の研究書(一次史料所有者による許可が得られにくい)、教科書(学生による無許可コピーを許しがち)などは、オープン・アクセスのコンテンツとしては、相応しくないと考えている。

もっとも、本稿執筆の時点(二〇〇八年二月初旬)では、わずかに五点のコンテンツが公開されているに過ぎず、その効果は(正も負も)明らかでない。しかし、この取り組

みに関して学内外で紹介された結果、コンテンツへのアクセスは予想以上に高い。また、地域研究の分野では、高い業績を挙げた研究者たちが自らのフィールドノート（つまり研究の大本のソース）をデジタル化してリポジトリに掲載し、その結晶としての学術書を併せて公開することで、若い世代に対して研究の全体像を示していこうという興味深い試みも企画されている。要するに、当会と図書館の取り組みが、我が国初の試みとして十分に話題を呼んでいる、と自ら信じることはできる。

出版を出版人の生業として、図書館を図書館人の生業として見ているだけでは、既存のシステムが隘路に陥るのは確実である。知のコミュニケーションの核としての位置を自覚して共同することこそ、既存システムの危機を乗り越え、知のコミュニケーションを再構築できる道である。行動力と可能性に満ちた集団として、大学出版部の果たす役割は一層大きくなっている。

#### 文献注

- (1) G・R・ホウズ（箕輪成男訳）『大学出版部——科学の発展のために』東京大学出版会、一九六九年。（原タイトル：To Advance Knowledge: A Handbook on American University Press Publishing<sup>®</sup>, American University Press Services, 1967）
- (2) レイム・クロウ（栗山正光訳）「機関リポジトリ擁護論——SPARC 声明書」（原タイトル）“The Case for Institutional Repositories: A SPARC Position Paper”, 2002) [http://www.tokiwac.jp/~mkturi/translations/case\\_for\\_ir\\_jpr.html](http://www.tokiwac.jp/~mkturi/translations/case_for_ir_jpr.html)

- (3) レイム・クロウ、同前。
- (4) 箕輪成男「威信のための装置」『大学出版』No. 50、10—13頁、二〇〇一年。
- (5) Sonya White & Claire Creaser, Trends in Scholarly Journal Prices 2000-2006, Loughborough University, 2007 (<http://www.boro.ac.uk/departments/dls/lisu/downloads/op37.pdf>)
- (6) 赤澤久弥「大学出版部と大学図書館」『大学出版』No. 64、六一—八頁、二〇〇五年。

# ロシア科学アカデミー図書館「三笠宮文庫」贈呈式に出席して

三浦邦宏 (国際部会長、明星大学出版部)

社団法人出版文化国際交流会から大学出版部協会山口雅己理事長宛に、ロシア・サンクトペテルブルクにおける「三笠宮文庫」贈呈式への出席要請があったのは十一月半ばのことであった。生憎山口理事長は所用で出席できず、市川副理事長・三浦事務局長と国際部会長である私に対応が委ねられた。三者で協議の結果、都合がつくのは私だけであったので、急遽山口理事長の代理として私が出席することとなった。

とにかく出発まで日が迫っており、交流会横手事務局長に連絡をとって十一月二十九日、交流会事務所に石川専務理事・横手事務局長を訪ね、改めて「三笠宮文庫」贈呈式についてのレクチャーを受けた。この事業は社団法人出版部協会、社団法人自然科学書協会ならびに我々大学出版部協会の三団体がフランクフルト国際ブックフェアに出展した図書を、今後三年間に互に継続して寄贈することにより行

われるとのことであった。その後山口理事長に交流会との打ち合わせにつき報告した際、経済的な負担は難しいが、協会加盟出版部が出版した図書を寄贈することは「三笠宮文庫」の歴史的背景に加え、実際に日本研究や日本語学習に利用されていることなどの観点から理解が得られるのではないかと私は考え、三年間が経過した後も大学出版部協会として更に図書の贈呈を継続してはどうか、と山口理事長に申し上げたところ直ぐに同意して下さった。そしてサンクトペテルブルクでの贈呈式の際、我々のその意向を是非ご披露いただきたいとまで言って頂いたのである。十二月六日再度交流会事務所を訪ね最後の打ち合わせを行った際、大学出版部協会としては当事業が完了した後も継続して交流会を通じ「三笠宮文庫」に図書を寄贈していきたいのでご協力をお願いしたい旨伝えると、大変有り難いことので歓迎するとのこと返事を交流会から頂いた。

十二月十一日石川専務理事に伴われ成田国際空港を出发、モスクワ・シエレメチエボ国際空港までおよそ一〇時間のフライトであった。機内で改めて石川専務理事よりスケジュールの確認や、今回の「三笠宮文庫」贈呈式の背景などについての詳細なレクチャーを受けた。この「三笠宮文庫」贈呈式を企画された、在サンクトペテルブルク日本国総領事・城所卓雄氏の熱い思いが感じ取られ、当初は果たして私に山口理事長の代理が務まるのかと多少のためらいもあったが、しつかりと役割を果たさなければと気持ち新たにした。定刻通りモスクワ・シエレメチエボ国際空港に到着、国内線に乗り換えサンクトペテルブルク・プルコボ空港に到着、ツーリスト手配の車で宿所ネブスキーグランドホテルにチェック・インしたのは午後一〇時近く、日本との時差は約八時間、一四時間ほどの長旅であった。

翌日城所総領事のご配慮で昼食会が開かれた。昼前吉永小麻子副領事（文化広報担当）の迎えの車で『將軍』という日本食レストランへ案内される。城所卓雄総領事に会い挨拶をし、持参した協会のリーフレット、合冊目録、四〇周年記念誌、日・韓・中三方国セミナー資料等を渡し、簡単に協会活動を説明するうちに、ロシア科学アカデミー図書館の副館長Dr.ナタリヤ・コロボコヴァ女史、アジア・アフリカ文学部タイアナ・ピノブラードヴァ職員、ヴォジエヴォツキイ・イーゴリ東洋学研究所付属図書館司書、バルバラ・ベレツキナ日本語・日本文学担当の四名が到着さ

れ、同じく持参の協会関係資料を渡し、挨拶を交わす。昼食会場はかつてプーチン大統領がサンクトペテルブルク時代に度々訪れ、利用していた部屋とのことであった。

城所総領事はモスクワ大使館勤務も経験されており、在外公館長としての役割を十分心得ておられ、トヨタ自動車の工場が稼働し十二月二十三日に第一号車の完成式があり、プーチン大統領が出席する予定であること、また来年四月下旬にはトランスエアロ航空が、週二便成田との間に直行便を就航させるなどの情報を伝えて下さり、これから日・ロ間にとって、サンクトペテルブルクが重要な役割を果たすことになるであろう、との感想を述べられた。

昼食をとりながら吉永副領事が素早く通訳をして下さり、ロシア科学アカデミー図書館の方々と意見交換を行った。同図書館においても予算削減に伴い職員数が減少する一方、蔵書数が増加しており深刻な問題となっている。ロシア科学アカデミー図書館はロシア各地にあり、サンクトペテルブルクの図書館がそれらの全てを統括している。ウラル地方では財政難等の事情から、市当局に図書館が売却されるなどの深刻な状況が出現しているとのことであった。そのような中で最近イスラムに関する図書五〇〇〇冊が同図書館に寄贈されたとの発言があった。すかさずその発言を受け、交流会石川専務理事が「三笠宮文庫」への図書寄贈に触れ、当面三年間の事業であるが大学出版部協会が独自のプランを持っているようです、と私に発言を促さ



昼食会の後、城所総領事、コロポコヴァ副館長（左から4、5人目）を囲んで

れた。それを受け、「三笠宮文庫」の歴史的背景と価値に鑑み、我々大学出版部協会として蔵書五〇〇〇冊を目指し、交流会を通じ継続して図書を送り続けて行きたいと考えています。ただしあなた方の仕事が増えることになりませんが、と発言したところ、心から歓迎するとの回答を頂いた。まさに出版文化国際交流会を通じ、もう一歩踏み出した日・口の新たな民間交流が生まれた瞬間であったと思う。無論在サンクトペテルブルク日本国総領事館の、全面的なバックアップがあつて初めて実現することではあつたが、城所総領事はこの提案を快く受け止めて下さった。

翌十二月十三日午前、吉永副領事のご紹介で、サンクトペテルブルク国立大学東洋学部にビクトル・ルイービン教授を訪ねた。ルイービン教授は快くお迎え下さり、思いがけず日本語を専攻する一年生の授業を見学する機会を与えて下さった。ヨーロッパの大学は概ね九月に新学期が始まる。未だ二カ月余りしか経っていないというのに日本語での自己紹介がしつかりでき、さらには、いろいろ47文字を請じているのには正直言つて驚かされた。ルイービン教授は、日本の歌謡曲のカラオケを利用するなど、極めて工夫された独自の授業を実践されていた。また、ルイービン教授から頂いた同教授の論文「サンクト・ペテルブルグ（ロシア）における日本語学習と日本研究三〇〇年のあゆみ」（国際日本文化研究センター紀要、『日本研究』第三十二集平成十八年三月抜刷）によると、十八世紀初頭カムチャツ





サンクトペテルブルク大学東洋学部日本語学科1年の学生たちとルービン教授

カに漂着した日本人（伝兵衛）が当時の首都モスクワへ連れて行かれ、時の皇帝ニコール一世に謁見した。ロシアの領土拡大を目指し、東方への進出の野望を持った皇帝は、新首都サンクト・ペテルブルクの完成後彼を新首都に移し、日本語教師の称号を与え、一七〇五年航海数学学校内にロシア最初の日本語学級を開かせたと言う。日本から一万キロメートル以上離れたサンクトペテルブルクで、実際に日本語を学んでいる学生の存在を目の当たりにし、三百年にも及ぶロシアの日本語教育の歴史を知り、改めて「三笠宮文庫」の存在する意義の深さを強く認識した。ホテルに戻りいよいよ「三笠宮文庫」贈呈式に臨むため、徒歩で在サンクトペテルブルク総領事館に

向かう。城所総領事は快く石川専務理事と私を迎えて下さり、贈呈式前のお忙しいひと時を割いて、サンクトペテルブルクにおける日本の状況について細かくご説明下さった。気さくで在外公館長の務めを私たちにお示し下さった。城所総領事のお人柄に感えずは、と心を新たにされた。ほどなく出席者が揃い、総領事館ホールで贈呈式が始まった。先ず城所総領事が「三笠宮文庫」贈呈式挙行の経緯を披露し、三笠宮崇仁親王殿下のメッセージを奉読された。引き続き交流会石川専務理事が挨拶に立った。同文庫については後述のとおりだが、改めて石川専務理事の挨拶の概要を記したいと思う。一八八二年有栖川宮熾仁親王殿下が明治天皇の名代としてアレクサンドル三世の即位を祝い、ロシアを訪れた際、サンクトペテルブルク大学で日本語が教授されていることを知り、大変感動され日本に帰国後ご自身の蔵書四七〇〇冊をサンクトペテルブルク大学に寄贈された。これが所謂「有栖川文庫」である。その後レニングラードと名を変えた同市は、第二次大戦時ナチス・ドイツにより壊滅的な打撃を受けたが、同大学日本語学科教師オリガ・ペトロワ女史が身をもってこれを守り抜き、現在も大切に保管され且つ利用されている。この話をお聞きになられた三笠宮崇仁親王殿下は一九七七年日本の関係団体に呼び掛け、三八一冊の図書をロシア科学アカデミー図書館に寄贈された。これが「三笠宮文庫」である。その後二〇〇三年、三笠宮崇仁親王殿下を名誉総裁に戴く社団法

後二〇〇三年、三笠宮崇仁親王殿下を名誉総裁に戴く社団法

人出版文化国際交流会が創立五〇周年を記念し、四一八冊の図書と同文庫に贈られた。その後交流会は同文庫の拡充を計画していたが、現在の七九九冊を当面五〇〇冊規模まで拡充したいと考え、交流基金と共同設営しているフランクフルト国際ブックフェアの日本ブースに出展された出版粋会、自然科学書協会、および大学出版部協会の図書を今後三年間に互り寄贈する運びとなった。この計画に対し、在サンクトペテルブルク城所日本国総領事のご配慮により、この度の贈呈式が挙行される事になった訳である。石川専務理事はこの「三笠宮文庫」の歴史と関わって来られた方々の思いを伝え、この度贈呈する三団体を代表し、日本から出席した私を紹介して下さった。

私は歴史あるロシア科学アカデミー図書館の「三笠宮文庫」に対する今回の図書贈呈は取り敢えず三カ年の時限事業とのことであるが、大学出版部協会は独自に同文庫蔵書五〇〇冊を目指し、その後も継続して我々の出版する図書を贈呈し、日・ロ間の相互理解と友好に些かなりとも寄与することが出来れば、これに優る喜びはありませんと挨拶した。

これに対し、ロシア科学アカデミー図書館副館長Dr.ナタリヤ・コロボコヴァ女史から、ロシアと日本との交流については初期段階から同図書館が関わってきた。一七三六年にはロシア科学アカデミーにおいて、ヨーロッパで初めての日本語学校が開設され、日本からの漂流民、ゴンザグが



贈呈式で挨拶する城所卓雄総領事

る。日本との善隣友好関係は非常に永い間続いてきた。これを常に支えてきたのが官民双方におけるそれぞれの文化、伝統に対する相互関心であると思う。尊敬する皆さん、本日このような贈呈式を催して下さい下さった日本の関係者の方々に深く感謝申し上げます、とお礼の挨拶があった。

日本語の授業を行い、最初の三年間に幾つかの日本語の教科書を作成し、一八世紀には同アカデミーに日本の古文書が存在していた。更に日・口間に外交関係が成立後、蔵書交流が始まり、主に日本の学術団体との交流を中心に、様々な歴史を経て現在に至っている。日本という国は同図書館の活動にとって大変重要な位置を占めている。



殿下の親書と図書の日録を贈呈。左から筆者、石川専務理事、城所総領事、コルボコヴァ副館長

「三笠宮文庫」贈呈式はこれにて滞りなく終了、引き続き城所総領事より国際交流基金による日本語教材寄贈式が行われ、ロシア科学アカデミー東洋学研究所を始め九つの教育機関に対し、総額七〇〇〇\$にのぼる日本語教材が贈られた。以上を以て儀式はすべて終了、全員で乾杯し軽食でのパーティーに移った。その後予定には無かったことだが、教材の寄贈を受けた大学の学長、学校の校長達から次々

に感謝の言葉が述べられた。私にとつて驚きだったのは、二つの小学校（と言ってもロシアでは小・中・高十二年制の一貫教育）で日本語が教えられている、ということであった。やがて贈られた日本語教材を大事そうに抱え、三々五々帰っていった。石川専務理

事と共に城所総領事、吉永副領事に「三笠宮文庫」贈呈式の労をおとり戴いたことに感謝を申し上げ、今後のご協力をお願いし総領事館を辞した。

翌日昼ホテルをチェックアウト、ツーリスト手配の車でブルコボ空港へ。一五時三〇分、短い滞在ではあったが、非常に意義深かったサンクトペテルブルクに別れを告げ、モスクワ・シエレメチエボ空港で乗り継ぎ、日本では考えられないほど厳しいセキュリティチェックを受け、定刻を一時三〇分近く遅れ、二〇時三〇分SU五八一便はモスクワを離陸、帰国の途に就いた。

一〇時間に及ぶフライトの間、日・ロ間の民間交流の歴史、実際に目の当たりにした真剣に日本語を学ぶロシアの学生、「三笠宮文庫」の意義、そしてそれらの何にも増して社団法人出版文化国際交流会の存在の大きさを今更ながら認識し、これから我々大学出版部協会が同交流会との協働をどう構築して行くのか、などと今回のサンクトペテルブルク行きから与えられた宿題の大きさを改めて思いつつ、十二月十五日昼過ぎ成田空港に降り立った。

# 大学出版部ニュース

## 年度の変わり目で

三月。殆どの大学出版部も年度末。決算に人事に大童のことだろう。

万葉の桜の時期はまた、去る人あり来る人あり、生々流転を垣間見る物悲しい季節でもある。

さて大学出版部協会も三月が年度末。重複する部分もあるが、協会の一年を改めて振り返ってみよう。

二〇〇七年度は協会活動にとっても大出版部という存在にとっても、ターニングポイントとなるような出来事があった。

その一つは何と言っても、協会初の試みとしての『ナチュラルヒストリーの時間』の発行である。ブックフェアの開催と書籍の刊行とを組み合わせた編集部会と営業部会の共同事業として行われたものであるが、そのために国際書籍コードを取得したことの意味も大きい。協会活動の将来を展望する時、その意味合いが理解できるだろう。

国際活動に目を転じれば、(社)出版文化国際交流会の国際ブックフェアへの専門

家派遣は、この一年で驚くほど充実した。それを支えてきた国際部会に参加者も少なく、孤軍奮闘の感無きにもあらず、という実態ではあるが、その熱意と行動力には脱帽である。二〇〇七年だけでも①プラハ(法政大・古川氏)、②ベオグラード(電機大・菊地氏)、③サンクトペテルブルク(明星大・三浦氏)の派遣があり、二〇〇八年度も四月のプラハ(武蔵野美大・平井氏)と五月のワルシャワ(大阪大・落合氏)への専門家派遣が決定している。

二〇〇八年度は協会創立四十五周年を迎える。四十五周年事業として「大学出版部協会四十五周年記念・一万冊ブックフェア」も先行スタートした。電子部会主導による大学図書館とのシンポジウムも開催された。新規協会加盟校としては東京農工大学出版部が三番目の加盟校として協会に加わる予定である。

二〇〇八年度は協会活動の目標として掲げてきた「協同(共同)事業」の実体が求められ、そして問われることになる。

## 北海道大学出版会

▼ディグビー、フアインステイーン編・松村高夫外訳『社会史と経済史』(四六判・三一五〇円) 農業革命や産業革命などイギリスの経済史・社会史の古典的論点を、新しい史料と方法で分析。漸進性・連続性を強調した新解釈を平易に提示。▼島山武道著『アメリカの環境訴訟』(A5判・五二五〇円) アメリカ環境法研究の第一人者が、一九七〇年代から最近までの環境訴訟の動向を、原告適格論の流れに焦点を合わせて網羅的、かつ簡明に叙述。▼白取道博著『満蒙開拓青少年義勇軍史研究』(A5判・五六七〇円) 大日本帝国政府が実施した基本的な政策の展開過程を、制度の創設・再編・変容・解体まで、膨大な資料に基づき体系的・実証的にたどったわが国で初めての労作。▼北村嘉恵著『日本植民地下の台湾先住民教育史』(A5判・六七二〇円) 先住民政策の展開過程とその特徴を、先住民児童を対象に台湾総督府が設置した蕃童教育所の歴史に即して考察。統治者側の資料をも広く渉獵し、その創設・普及過程、植民地政府の試行錯誤を説明。植民地教育の歴史を新たに捉え直す。

## 弘前大学出版会

▼『日本語と英語で読む―津軽学入門』ハンナ・ジョイ・サワダ／北原かな子編・訳（B5変型判・一一五五円）津軽地方は豊かな自然と文化の歴史に恵まれた魅力的な地域である。本書は弘前大学で学ぶ留学生に津軽の歴史文化を伝えるため日英両語によるこれまでの講義内容をもとに編集された津軽文化への入門書である。①歴史（亀ヶ岡文化、弘前藩と城下町、アイヌ、西洋文化の受容、近代化）、②文化（津軽弁、文学、津軽三味線、津軽塗、こぎんざし、藍染）、③民俗と自然（イタコやオシラサマ、ねぶた、白神山地）の三部から構成されている。

▼『瞳孔の生物学と神経学』正村和彦著（A5判・一八九〇円）瞳孔は眼の中央にある黒く丸い部分である。これは大きくなったり、小さくなったりしている。瞳孔の動きにはわけがある。瞳孔の動きは脳によって制御されている。このため、瞳孔は脳の働き、さらに心の動きを現しているといえる。本書では瞳孔の動きが脳によってどのように制御されているか、脳の活動状態と障害がどのように瞳孔の動きに現れるかを解説している。

## 東北大学出版会

▼原田夏子・原田隆吉著『回想東北帝国大学―戦中戦後の文科の学生の記―』（四六判、二六三頁、二二一〇円（税込））著者は、戦中戦後を東北帝国大学学生として過ごした。本書では、二人の勉学の様子、有名教授や中国人留学生との人間的な交流など、当時の混乱期に帝国大学に籍を置いた学生の生活が臨場感豊に描かれ、当時の学生達の豊かな精神生活、内面的向上心のすがすがしい雰囲気を読み取ることができている。

▼栗原隆編『芸術の始まる時、尽きる時』（A5判、四八〇頁、三六七五円（税込））私達の生活に必要なものを作ることと、芸術作品を制作することは同じなのか。どこからが芸術作品であるのか。芸術作品に込められた意味をどう分析するのか。ジャンルとしての芸術はどのようにしていつ自立したのか。ヘーゲルの「芸術終焉論」を射程に収めながら、哲学、美学、美術史、文学、表象文化論、歴史学などの視座から多角的に分析する試みである。素材を超えたところに美が生まれることを解明している。

## 流通経済大学出版会

▼Robin JOKANO 『IT'S YOUR LIFE and other stories for discussion and presentation NEW, REVISED EDITION』A5判・一一四頁・一六八〇円

英語を学ぶ日本人が英語で考え、自分の意見を生きた英語で表現できる力をも身につけるための教科書。内容は外国に旅行した日本人と日本に住んでいるアメリカ人をテーマにした二十四話のショートストーリーで構成されている。文化やマナーの違いからしばしば生じる誤解や困難のいくつかを取り上げ、自分と同じ状況に置かれたらどうするかという意見を持ちやすいように、異なる視点から学べるようになっていく。

初版では、各ストーリーをもとに学ぶ人が自分なりに考え、それを英語で表現できるように、各テキストを二ページにおさめ、レッスンごとに短いエッセイを読み、単語を学び、質問に答え、短いエッセイを書く構成にしてあったが、改訂版では、さらに二ページを追加した。ここでは、ペアトリーキングのための質問と返答を具体的事例として掲載し、より実践的な学習ができるようにした。

## 聖学院大学出版会

▼ジョン・ウィット著（大木英夫・高橋義文監訳）『自由と家族の法的基礎』（四六判、三三六〇円）

本書は、自由、デモクラシー、教会と国家、契約（コヴェナント）と共同体、結婚と家庭生活についての西洋の法的伝統を中心とした、一連の簡潔な歴史研究である。

特に、本書では、現代において等閑視されがちな西洋の伝統における法と政治と社会の宗教的な源泉と次元を「回復すること」（retrieval）、今日の時代のために伝統のうちにあるもつとも永続性の高い教訓を「再建すること」（reconstruction）、教会と国家と社会が今日直面している困難な課題を歴史的情報に基づく宗教的見地と「再連繫させること」（reengagement）、この三つが目指されている。

ジョン・ウィット教授は、現在、アメリカ・ジョージア州にあるエモリー大学法学部教授であり、「法と宗教研究所」所長としてヨーロッパの学者との共同研究など世界的に活躍している学者である。

本書には、二〇〇六年に聖学院大学の招聘による講演を基にした原稿を収録。

## 聖徳大学出版会

▼既刊「心と身体の癒しシリーズ」

第一巻『音楽療法を語る』―精神医学から見た音楽と心の関係  
村井靖児著／四六判／上製本／二八〇頁／定価二一〇〇円

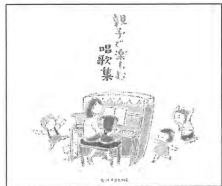
本書では、音楽療法の第一人者である著者が音楽療法の理論、心身と音楽との関係を解き明かす。

第二巻『医における癒し』―人間関係の形成のなかから  
森彪著／四六判／上製本／二八〇頁  
定価二一〇〇円

本書は、医師である著者が実際の医療現場で実践し、その経験を基に人間的な眼差しで書き下ろしたものである。

▼『親子で楽しむ唱歌集』  
（CD 三四〇〇円税込 二枚組 女声アンサンブル）

花、春が来た、春の小川、めだかの学校、雪、村祭、茶摘、こいのぼり、うみ、故郷、赤とんぼ等おなじみの歌全四二曲を収録



## 麗澤大学出版会

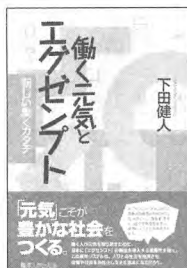
▼福田恆存著『問ひ質したき事ども―言論の空しさ』―「福田恆存評論集・第十二巻」（二九四〇円）。

▼下田健人著『働く元気とエグゼンプト―新しい働くカタチ』（一六八〇円）

働く人が元気を取り戻すために、日本に「エグゼンプト」の仕組みの導入を提唱。多様な経験と知見を基にした書下ろし。

▼井爪 毅他著『今さら聞けないCSR―職場の新常識―気読み』（一六八〇円）「企業の社会的責任（CSR）」を、著者の実務経験を踏まえながら、実際のエピソードを基に解説する。CSRこそ、企業存続のベースである。

▼松崎俊道著『元気力―あなたの心を切替える―〇〇のスイッチ』（一三六五円）いい仕事、いい人生。経営コンサルタントのキャリアを生かして「元気を回復する」ための〇〇のアドバイス。



『働く元気とエグゼンプト』

## 慶應義塾大学出版会

- ▼細田衛士著『資源循環型社会—制度設計と政策展望』（総合研究 現代日本経済分析2）（四二〇〇円） 静脈経済における商品価値を理論的に考察し、製品特性ごとの制度のあり方を実証的に分析。その上で、地域・広域循環の最適性など制度・政策的課題に対し国際的視野から取り組み、「資源循環型レジーム」を提示する。
- ▼矢野誠編著『The Japanese Economy - A Market Quality Perspective』（六〇九〇円） 慶應義塾大学経商連携「二一世紀COEプログラム」の研究成果を集大成。日本経済停滞の原因と再生への条件を「市場の質」の視角から解明。新たな経済理論の構築、大規模なパネルデータ分析を経て、具体的な制度設計・政策を提言。
- ▼山本達也著『アラブ諸国の情報統制—インターネット・コントロールの政治学』（三三六〇円） グローバル化に直面するアラブ諸国はインターネットに對しいかなる政策的対応を図っているのか。情報化の推進により経済的な利益を最大限に得つつ、政治的リスクを最小限に抑制する、アラブ諸国の巧みな情報統制政策の実態を技術的・政治的な視点から解明。

## ケンブリッジ大学出版局

- ▼Classical Novae, 2nd Edition (Hardback 9780521843300, USD 145.00)
- シリーズ Cambridge Astrophysics の新刊。古典新星の第二版で、最新の研究から導き出される新しい見解をまとめている。
- また、熱核反応、新星の進化、新星天気、新星風、粉塵や分子の進化、新星の残骸などを考察する。大学院生から研究者を対象とする参考書。
- ▼The Martian Surface (Paperback 9780521866989, USD 195.00)
- シリーズ Cambridge Planetary Science の新刊。世界レベルで初めての赤外線反射を用いた火星地表の地図が含まれ、鉱物から分かる過去の気候変化や、地表下の水の貯水池の発見などがまとめられている。一九九二年以来の火星の組成や鉱物の重要な研究がまとまった1冊。地球惑星科学、天文、惑星探査、惑星地質、惑星の地質化学を学ぶ学生から研究者までを対象。専門用語の詳しい解説付。
- これらのタイトルは今年、創立一〇〇周年である日本天文学会の春季年会会場においてご案内した。

## 産業能率大学出版部

- ▼宮脇敏哉著『マーケティングと中小企業の経営戦略』（一九四〇円）
- 最新マーケティングの状況及び中小企業経営、ベンチャー企業経営について網羅。
- ▼（学）産業能率大学総合研究所編著『パリエイノベーション—顧客価値・事業価値の創造がイノベーションを成功に導く—』（二六二五円）
- 本書では「テクノロジー・マーケティング」（技術をテコにして顧客価値を創出する考え方と技法を提案）を發展させ、顧客価値の創造に加えて、事業価値を生み出すイノベーションのあり方と方法を提案。
- ▼波頭亮著『リーダーシップ構造論』（二一三〇円）
- 分析の対象を企業という組織集団に照らして、リーダーシップの体系化と構造解明に真正面から取り組んだ研究の成果。従来からのリーダーシップ研究と、筆者の豊富な経営コンサルティング経験の両面から「リーダーシップ」にアプローチしたものをまとめている。
- 好評発売中の「戦略策定概論」「組織設計概論」に続く戦略的経営に関する三部作の完結編。

## 専修大学出版局

▼藤田由紀子『公務員制度と専門性―技術系行政官の日英比較』（四四一〇円）

「スベシヤリストとしての公務員」の役割、育成システム、人事、組織などを検証。特に、土木・厚生・医系分野について、技官制度の歴史的考察や英国との国際比較を加える。そして公務員制度改革を検討する。

▼岡野 Heinrich 圭一『ドイツ中世美術Ⅰ』（九四五〇円）中世初期からメロヴィング朝、カロリング朝、オットー朝、ロマネスクの建築、彫刻、牙彫、宝飾、大型絵画、ステインドグラス、板絵、写本画にいたる美術史を叙述。政治史などの時代概観から美術の様式、作品の形体などを丹念に描写した力作である。

▼専修大学社会知性開発研究センター編『ルイ16世の裁判に関する国民公会議員の見解』（全6巻）（二三万一〇〇〇円）フランス革命期の国民公会においてルイ16世の予審と裁判が行なわれたが、同時に議員の詳細な見解が国立印刷出版所などで冊子に印刷された。本史料集には、M・ベルンシュタイン文庫所蔵の全6巻本蒐集物に加えて、7点の冊子を補遺として足した全394点の議員の見解を収録。

## 大正大学出版会

▼赤平泰処（和順）著『我が心の書』（A4判 一四〇頁。三二五〇円）。毎日書道展審査会員、貞香会会長などを勤める作者が「我が心の書」をテーマに一二〇点余りの作品を収録し、書の美を追求する。

—— 近刊 ——

▼小嶋知善編『久保田正文著作選』（A5判 六〇〇頁）。久保田正文は、第二次世界大戦後、短歌雑誌『八雲』の編集者として短歌の世界に登場し、その後、文藝評論家としての仕事を通じて世に知られるようになった。『文學界（文藝春秋刊）掲載「同人雑誌評」の仕事を顕彰され、菊池寛賞も受賞している。戦前に同人誌に発表したまま埋もれていた前衛的な自作短歌と、生前最後となった未発表のインタビューをはじめ各誌に発表した評論・随筆など文学的、資料的価値があるものを選択して収録する。戦後の時代を文学的視点から描いた貴重な証言ともいえるものである。

▼倉島尚高著『日本語辞書学への序章』（A5判 三八〇頁）

▼司馬春英編『意識と仏教―仏教と西洋哲学との対話―』（A5判 二八〇頁）

## 玉川大学出版部

▼『高等教育市場の国際化』塚原修一編著（A5判上製・二六四頁・四二〇〇円）知識社会の到来により、知識生産を役割とする高等教育の市場化が加速度的に進行している。WTOの高等教育サービス貿易自由化交渉、米大学日本校等を検討し、国際化に対する日本の戦略を考察する。



▼『旅行マーケティングの戦略―商品企画と経営―』折戸晴雄著（A5判並製・一六〇頁・二三一〇円）ジャルパックで大ヒット商品を手がけた著者が、その体験をもとに商品企画の開発から旅行会社の経営までを説く、観光ビジネス論。観光を学ぶ者必携の一冊。資料付き。

▼『きょうから私も英語の先生！―小学校英語指導法ガイドブック―』佐藤久美子・松香洋子著（B5判並製・二〇八頁・三一五〇円）小学校英語の意義から具体的なカリキュラム案、指導法までを網羅する一冊。歌・チャンツ、読み聞かせ等、子供が楽しめる活動案を提供。教室ですぐに使える教材・CD付。



## 中央大学出版部

▼鳥居・鷺谷・伊藤・森岡・藪田編『21世紀の人間と経済』（三〇四五円）人間と経済に関わる現実的諸問題を社会の第一線で活躍する識者が論じ示唆に富む。経済学部創立百周年記念シリーズⅢ。

▼百瀬睿三著『不正契約を規制する法理の研究』（四二〇〇円）契約に潜む現実の不正を規制する法の実態分析。実用主義法学に軸足を置く企業OBによる学術書。ビジネススマン向き。

▼大浦暁生監修『ウイリアム・スタイロンの世界』（三三三六〇円）悲劇的な時代状況と深く誠実に対峙し、アメリカ文明のあり方と人間的な生き方に鋭い問題を投げ続けた作家の全体像に迫る。

▼中央大学人文科学研究所編『アルス・イノヴァティヴァ』（二九四〇円）近代以降の芸術の歴史において様々なイノベーションを発生させてきたものは何かを検証する。人文科学研究所叢書四二一。

▼中央大学人文科学研究所編『メルヴィル後期を読む』（二八三五円）複雑・難解で知られる後期メルヴィルについて新旧二世代の論者が独自の視点で論じる。人文科学研究所叢書四三。

## 東京大学出版会

▼工藤章・田嶋信雄編『日独関係史 一八九〇—一九四五』（全3巻、各五八八〇円）

一九四五年度までの近代日独関係の歴史は、日独伊三国同盟に象徴される「友好・協調」という側面だけでなく、「対立・葛藤」という面も色濃くあった。その全体像について、中国大陸をめぐる両国の相克など東アジア国際関係の視点から重層的に描き出した研究論文集である。

I 『総説／東アジアにおける邂逅』は、総説でこの時代全般を通じての日独の政治・外交関係と経済関係を論じたうえで、各章では一九二〇年代までの両国の対抗・学習・協力の実相を描き出す。

II 『枢軸形成の多元的力学』は、三国同盟の締結に至る一九三〇—四〇年代の曲折に満ちた日独関係の形成過程を、当時の東アジア国際情勢を踏まえ政治的・軍事的・経済的内実に注目して論じる。

III 『体制変動の社会的衝撃』は、軍国主義・ナチズムの台頭といった日独両国における社会環境の激変によって、個人や企業の活動がどのような影響を受けたのかについて焦点をあてる。

## 東京電機大学出版局

▼『画像電子情報ハンドブック』画像電子学会編（B5判／二九四〇〇円）

本書は画像電子学会創立三五周年及び東京電機大学出版局創立一〇〇周年を記念して出版された。一九七九年に同学会から『画像電子ハンドブック』が刊行されるが、今回はそこに「情報」の二文字を加え、画像電子情報技術に関する全知識について、二一世紀に入ってから膨大な知見や応用の動向を含めて詳細に整理し尽くした結果、約千頁の大部となった。さらに全文検索が可能なPDFデータを収録したCD-ROMを付録。多様な使い方が可能となるよう配慮した。研究者・技術者・実務者、大学・研究所・企業の図書館に必携の一冊である。



## 東京農業大学出版会

▼「園学」のすすめ―造園を哲学する―  
野澤 清著

本書は、亡き著者が長年にわたって書きとめられた「園学百項」を整理し、編んだもの。ソノを作ることの意義の哲学ともいえる本書は、恩師の意思を継ぐ弟子たちにより集大成された。

平成二十年二月／四六判

二四〇頁／税込価格一三六五円

〈シリーズ・実学の森〉

▼中国の大学と農村は今―中国農業大学  
依命留学記― 五條満義著

著者が二〇〇六年九月から二〇〇七年九月までの依命留学期間中の活動経過やそこでの成果を一冊に集約したもの。

平成二十年三月／四六判

一六八頁／税込価格一〇五〇円

〈シリーズ・実学の森〉

▼ポランテア時代の緑のまちづくり  
進士五十八著

環境と共生する都市（浜松）の実現に欠かせない発想とは……。著者は造園研究で二〇〇七年紫綬褒章を受章された。

平成十九年十二月／四六判

一四八頁／税込価格六三〇円

## 法政大学出版局

▼J・デリダ／藤本一勇訳『哲学の余白』  
下（三九九〇円）〈差延〉や〈脱構築〉

の基本概念が明らかにされるデリダ一九七〇年代の重要なテキスト、論争を巻き起こした五論考を収める。上下巻完結。

▼H・G・ガダマー／饒田収・巻田悦郎訳『真理と方法Ⅱ』（四七二五円）〈哲学

的解釈学〉によって現代思想界に多大な影響を与えたガダマーの名著、待望の第Ⅱ巻刊行。その核心部分が示される。

▼M・レイボヴィッツ／合田正人訳『ユダヤ女ハンナ・アーレント』（六〇九〇円）アーレントにとって「ユダヤ性」は

ひとつの「経験」であり、そこから導き出される彼女の思想形成の側面を照射。

▼F・フユレ／今村仁司ほか訳『マルクスとフランス革命』（三九九〇円）フランス革命史の大家による実証研究を踏ま

えたマルクス批評。巻末にマルクスのフランス革命に関する貴重な論文を収録。

▼ヴォルテール／高橋安光編訳『ヴォルテール書簡集』（三一五〇〇円）名宛人二五人に及ぶ一〇八一通を編訳。当時のヨーロッパ社会における生活・人間関

係、思想を知ろうえで第一級の資料。

## 武蔵野大学出版会

▼田中教照著『仏は叫んでいる』（四六判・二三一〇円）

仏様はなぜ叫んでおられるのか？ 知らないで悪いことをするのは、知って悪いことをするのとどちらが罪が重いのか？ 夫に癌を告知する妻の第一声は？ 一度だけ起こることは、偶然でしかないのか？ 等々、身近なことが実は奥深いと気づかされる講演集。

▼齋藤諦淳著『教育改革の展開』（四六判・二三一〇円）

生き残る大学、解体する大学。教育改革は社会の必然である……。文部官僚として三〇年、大学人として二〇年のキャリアを貫く教育改革の理論。それを自ら実践して開かれた大学づくりの奮闘した日々。その軌跡は戦後教育の歴史と重なっている。



## 武蔵野美術大学出版局

▼『日本古典芸能史』今岡謙太郎著。  
A5判、二三六頁、定価二一〇〇円。

私たちはほんとうに古典芸能を知っているだろうか。たとえば能、歌舞伎、それぞれのジャンルはよく知っている。では出雲の阿国以前の、歌舞伎の出自は？猿楽と能の違いは？共通点は？そして伎楽はいつどこからやってきたのか。知っているつもりで実は知らない、芸能史の変遷という、曲がりくねった謎の隘路を、著者がわかりやすい語り口で丁寧に解き明かす芸能通史である。

序章では、祭祀から芸能への道筋を。一章で伎楽の正体を。二章では散楽の楽しさを。三―四章では田楽、猿楽、能の変遷と独自の美意識を論じ、五―六章では歌舞伎と人形浄瑠璃の成立と成熟・爛熟を説く。七―八章で、近世演劇の開花としての近松門左衛門を示し、九―十一章では落語・講談の登場による諸芸の交流を整理し、ついには河竹黙阿弥、鶴屋南北の登場によって近代演劇が拓かれたのだと結論する。

古典芸能マニアから初心者まで、読んで納得。ありそうでなかったお勧めの一冊。

## 明星大学出版部

▼経済指標解説法―経済を見る眼を養う  
吉川紀夫著

複雑な経済社会を生きていくためには経済指標を正確に読む力が求められる。指標に日頃から慣れ親しむこと、定義を把握しておくこと、意味を考えながらその限界を承知して使うこと。経済の実情を見る上で当面必要となる事項について、図表を示しながら分かりやすく説いた経済学入門。

新書判・本文三三六頁・九四五円 4月刊  
▼生活経済学の考え方―実感のある経済学への模索  
吉川紀夫著

人間を中心に据えた経済活動の「あるべき方向（規範性）」への理論や具体的指針を提示する。

A5判・本文三八〇頁・二六二五円  
▼子どもの発達と環境―児童心理学序説  
塚田紘一著

A5判・本文二七八頁・二四一五円  
▼現代公教育との対話―「教育国家」の創造と「スクール・ガバナンス」の確立  
樋口修資著

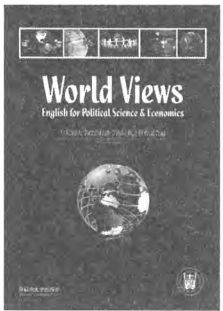
A5判上製・本文三八〇頁・三一五〇円

## 早稲田大学出版部

▼『スウェーデン議会史』（ステイグ・ハデニウス、岡沢憲美監訳／木下淑恵・渡辺慎二訳、三三六〇円）安定した議会は、どのようにして誕生したのか。一五世紀の議会開設から現代に至るまでの波瀾に富んだ軌跡を図版を交えて描く。

▼『地域間の歴史世界―移動・衝突・融合』（鈴木健夫編、五二五〇円）グローバルゼーションの一方で、「地域」が注目を集めている。「地域」の重要性と歴史の意味を再検討する。早大現代政治経済研究所研究叢書第二九巻。

▼『World Views: English for Political Science & Economics』（早稲田大学政治経済学術院英語教育部会編、二六二五円）選りすぐりの英文を、五つのテーマと三段階のレベルの一五のユニットに構成する早大政経一年生の共通テキスト。



## 東海大学出版会

近年の理系書目の中から高い評価を得たものを紹介します。

▼吉田武者『虚数の情緒—中学生からの全方位独学法』（四五—五五円）

日刊工業新聞社「技術・科学図書文化賞」のベストセラー。人類文化の全体的把握を目指した科目分類に拘らない教養書。歴史・文化・数学・物理・芸術など、様々な分野が虚数を軸に書かれている。二万部を超えて続伸中。

▼R・B・ニールセン著／秋山仁、奈良知恵、酒井利訓訳『証明の展覧会—眺めて愉しむ数学Ⅰ・Ⅱ』（各二二—三〇円）

図を用いて視覚的・直感的に数学の定理や公式を証明する。中学高校の数学教員から一般の数学フリークまで、幅広い支持を獲得している。

▼M・ポロン、E・ウォルフ著／草川徹訳『光学の原理 第7版Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』（各五七—七五円）

光学技術者の間で、法典、とまで言われる名著『Principles of Optics』の翻訳。様々な光学現象を方程式で記述し、光の振る舞いを解説する。光学関係者必携の書。

## 名古屋大学出版会

▼児玉善仁著『イタリヤの中世大学—その成立と変容—』（七九—八〇円）学生と教師、学位と学部、都市や教皇庁との関係など、ヨーロッパ最古の大学の誕生に迫りつつ近代への過程を見通した力作。

▼J・G・A・ポーコック著 田中秀夫／奥田敬／森岡邦泰訳『マキアヴェリアン・モーメント—フイレンツェの政治思想と大西洋圏の共和主義の伝統—』（八四—〇〇円）記念碑的名著の翻訳。

▼B・ベイリン著 和田光弘／森丈夫訳『アトランティック・ヒストリー』（二九四—〇〇円）大西洋を舞台としたトランスナショナルな歴史のダイナミズム。最新パラダイムをアメリカ史学の泰斗が描く。

▼内田綾子著『アメリカ先住民の現代史—歴史的記憶と文化継承—』（六三—〇〇円）自らのアイデンティティを再構築する政治・文化戦略を浮き彫りにした新たな先住民史。

▼木村 幹著『民主化の韓国政治—朴正熙と野党政治家たち1961～1979—』（五九—八五円）民主化の成否を分けた前提条件を指し示し、脱植民地化過程の政治的困難をも捉えた剖目の政治分析。

## 三重大学出版会

▼櫻谷勝美編著『新自由主義改革と日本経済』A5版二〇〇頁（本体一九〇〇円＋税）新自由主義をベースに経済社会の改革を実施した小泉政権下の日本経済を検証する。はしがき、第1章 現代世界と新自由主義、第2章 日本における新自由主義改革の現状と問題点、第3章 金融—新自由主義改革下の日本の金融改革、第4章 労働—新自由主義改革の現状と問題点、第5章 社会構造の変化と社会保障の危機、第6章 住宅と住環境—市場の限界と居住の権利、第7章 小売業—出店規制の緩和と商店街・まちづくり、第8章 農業・食料—誰のための農産物貿易自由化か、第9章 環境—市場活用型の環境政策は環境問題を解決するか？、第10章 アジアにおけるグローバルイゼーション、第11章 経済思想にみる新自由主義、おわりに—索引—新自由主義批判《参考文献リスト》

▼塚本晃久訳『パブアニューギニア小説集』四六版二〇〇頁（本体九四〇円＋税）

## 京都大学学術出版会

▼『イギリス炭鉱写真絵はがき』乾由紀子著（A5判・三〇〇頁＋カラー口絵八頁・三五七〇円）極めて危険で厳しい肉体系労働現場の写真が、絵葉書として二〇世紀初頭のイギリスで大量に流通した。丹念かつ実証的な調査により、炭鉱労働者たち自身の手による9×14センチの特異なメディアを活写する。図版多数。

▼『動物考古学 / Fundamentals of Zoo-archaeology in Japan』松井章著（A4判・三二二頁・七一四〇円）動物の骨格同定に不可欠な発掘現場の必携書。動物考古学の研究には、体系的な知識と技術が不可欠である。著者自ら収集した骨格標本に詳細な解説を加え、アジア太平洋地域での利用に配慮して全文に英訳を付した。

▼西洋古典叢書 テオプラストス『植物誌1』小川洋子訳（四六判変型・六〇七頁・四九三五円）『植物誌』全九巻は、最高水準の観察記録である五〇〇余種を記載した植物学書として時代を超えた価値をもつ。植物研究の重要な概念をつくり、さらに薬学などの応用科学書とつくり、さらには意義深い一書。（全三冊）

## 大阪経済法科大学出版部

▼アジア研究所は主に東アジアを中心とする学術の交流・発展を通じて東アジアの平和と繁栄に貢献することを趣旨として創設され、内外の大学、研究機関との国際シンポジウムを共催するなど、協力関係を築いています。研究叢書の刊行はアジア研究所の研究者の研究成果を広く学界のみならず社会に還元する活動とされています。今回は、そのアジア研究所研究叢書の既刊書から二点を紹介する。

▼『東アジア政治・外交史研究―「間島協約」と裁判管轄権―』白榮勲著・四四一〇円／一九〇九年に日本が清国と締結した「間島協約」と間島地方の朝鮮民族をめぐる日中両政府の交渉過程を検討することによって、当時の日中両国の政策判断と居住朝鮮人の動向を明らかにしようとしたものである。

▼『大國の攻防―世界大戦における日ソ戦―』A・コーシキン著・佐藤利郎訳・四八五〇円／ソ連とその同盟国たる米英両国が太平洋戦争にいかなる対応を取ったか、また、ソ連が第二次世界大戦中に対日政策および軍事戦略をどのように展開していったかを分析する。

## 大阪大学出版会

▼大垣一成・江頭靖幸・渡會仁・松村道雄・中辻啓二編『みず学への誘い』（A5判・並製・三〇二頁・二六二五円）。理系学部横断型研究プロジェクトが、水素結合の柔らかい性質、分子から流体に至る諸現象の水の基本物性、多面的機能を活用する科学技術の開発、治水などの豊かな社会基盤作りまで、水に関する基礎科学の深化と活用技術の開発に取り組み。

▼福井希一・栗原佐智子編著『キャンパスに咲く花 阪大吹田編』（四六変形判・カラー三〇〇頁・一九九五円）。北摂千里にもともと生えていた野の花や、大学として造成されてから新たに持ち込まれた植物、二五〇種の撮り下ろしカラー図版掲載。日本初のニュータウンとして開発された千里丘陵周辺の環境が変化していく様子も見て取れる植物の地域史。

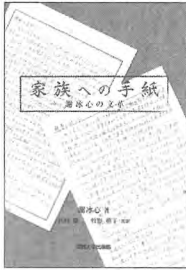
▼新世紀レクチャー金崎春幸・木村健治編『言語文化学への招待』（A5判・並製・三〇〇頁）。言語が人間の文化にとつて決定的に重要な役割を果たしていることが認識されはじめ、旧来の学問の枠組みの組み換えが行われつつある。言語文化学の内容・方法・対象を体系的に学ぶ。

## 関西大学出版部

▼平田重和著『カミユの思想と文学—ア  
ンガー・ジュマンとニヒリズムの克服—』  
(A5判・五二五〇円)時代の証言者と  
なり、ニヒリズム克服に挑戦した作家カ  
ミユの思想と文学を解明。小説「異邦人」  
を軸に、習作的な作品やジャーナリスト  
及び演劇活動に焦点を当てた。

▼浜本隆志・森貴史共著『文化共生学ハ  
ンドブック』(四六判・一八九〇円)異  
文化理解と多文化社会での共存共生を学  
びたい人に最適の入門書。欧州やアジア  
の文化と歴史の比較、思想・制度などを  
紹介。図版や表も多数収録。

▼謝冰冰著・萩野脩・二・牧野格子共訳  
『家族への手紙—謝冰冰の文革—』(A5  
判・二二一〇円)文化大革命時における  
女性文学者の手紙の翻訳。激動の当時は  
耐え抜き、家族愛と日々の生活を記録し  
た貴重な資料(本邦初訳)。



## 関西学院大学出版会

新刊

▼関西学院大学総合政策学部ユニバーサ  
ルデザイン教育研究センター・関西学院  
大学教務部キャンパス自立支援課KSC  
コーディネーター室編

K. G. りぶれつとNO. 21『ボ―ダ  
ーをなくすために—視聴覚に障害がある  
学生への学習支援—』(A5並製・一〇  
六頁・定価八四〇円)

近刊

▼武田 丈・横須賀 俊司・小笠原 慶  
彰・松岡 克尚編著

『社会福祉と内発的発展—高田眞司の思  
想から学ぶ—』(A5並製・二八八頁・定  
価二八三五円)

▼石原 俊彦・稲澤 克祐編著

『自治体職員がみたイギリス』(A5並  
製・二二二頁・定価二二一〇円)

▼広岡 義之編著

『新しい教職概論・教育原理』(A5並  
製・二五六頁・定価二四一五円)

## 九州大学出版会

▼山崎喜代子編『生命の倫理2—優生学  
の時代を越えて—』(A5判・三一五〇  
円)二十世紀に欧米諸国のみならず日本  
でも全盛を極めた優生学。科学の装いを  
まとったその思想の検証を通じ、生命倫  
理について考える。

▼Sumiaki Furukawa, Gert Schmidt 編  
『The Changing Structure of the  
Automotive Industry and the Post-Lean  
Paradigm in Europe: Comparisons with  
Asian Business Practices』(菊判・八四  
〇〇円)欧州自動車産業の構造変化につ  
いての国際共同研究の成果。

▼九大アジア叢書最新刊

⑩ 永池克明著『グローバル経営の新潮  
流とアジア—新しいビジネス戦略の創造  
—』(新書判・一〇五〇円)。グローバルゼ  
ーション3・0の時代の、ビジネスと国  
家、地域そして個人の新しい関係を探る。

⑪ 四日市康博編著『モノから見た海域  
アジア史—モンゴルと宋元時代のアジア  
と日本の交流—』(新書判・一〇五〇円)。  
交易船の碇石・木材・陶磁器・銀・銅銭  
など、日本とユーラシアの交流の諸相を  
様々なモノの移動から読み解く。

## 有限責任中間法人 大学出版部協会賛助会員

---

【50音順】2008年3月18日現在

株式会社朝日新聞社	〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2
亜細亜印刷株式会社	〒380-0804 長野県長野市大字三輪新屋1154
株式会社アベル社	〒162-0825 東京都新宿区神楽坂2-19 銀鈴会館408
王子製紙株式会社	〒104-0061 東京都中央区銀座4-7-5
株式会社大森印刷	〒105-0003 東京都港区西新橋3-17-1
岡本出版発送株式会社	〒353-0001 埼玉県志木市上宗岡3-16-2
城島印刷株式会社	〒810-0012 福岡県福岡市中央区白金2-9-6
株式会社協栄アドインフォ	〒101-0054 東京都千代田区神田錦町1-14 立花日英ビル2F
株式会社クイックス東京	〒170-0013 東京都豊島区東池袋4-27-14 山京システムビル4F
港北出版印刷株式会社	〒150-0002 東京都渋谷区渋谷2-7-7
三美印刷株式会社	〒116-0013 東京都荒川区西日暮里5-9-8
三立工芸株式会社	〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-4
三和印刷株式会社	〒381-2226 長野県長野市川中島町今井字薬師寺1822-1
信濃印刷株式会社	〒102-0072 東京都千代田区飯田橋4-1-11
新日本印刷株式会社	〒162-0845 東京都新宿区市谷本村町3-29
株式会社鈴木製本所	〒112-0014 東京都文京区関口1-17-5
ダイニック株式会社	〒105-0012 東京都港区芝大門1-3-4 ダイニックビル7F
株式会社太洋社	〒501-0431 岐阜県本巣郡北方町北方148-1
宗教法人天然寺	〒204-0021 東京都清瀬市元町1-4-5-711
東一紙業株式会社	〒101-0047 東京都千代田区内神田1-12-7
株式会社東京弘報社	〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-34
株式会社とうこう・あい	〒104-0061 東京都中央区銀座8-11-11
株式会社日本経済新聞社	〒100-8066 東京都千代田区大手町1-9-5
株式会社博報堂	〒108-0023 東京都港区芝浦3-4-1 グランパークビル17F
株式会社平文社	〒170-0005 東京都豊島区南大塚2-35-7
株式会社毎日新聞社	〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋1-1-1
株式会社遊文舎	〒532-0012 大阪府淀川区木川東4-17-31
株式会社読売新聞東京本社	〒100-8055 東京都千代田区大手町1-7-1

---

有限責任中間法人大学出版部協会は、私たちの活動をご理解・ご支援下さる皆様による「賛助会員」制度を発足いたしました。ここに趣旨にご賛同・お申し込みを頂きました各社様をご紹介させていただきます。なお「賛助会員」に関するお問い合わせは協会事務局までお寄せ下さい。

# 有限責任中間法人大学出版部協会 加盟出版部一覽

## 北海道大学出版会

〒060-0809 札幌市北区北9条西8丁目 北海道大学構内  
TEL 011-747-2308 FAX 011-736-8605

## 弘前大学出版会

〒036-8560 弘前市文京町1番地 弘前大学附属図書館内  
TEL 0172-39-3168 FAX 0172-39-3171

## 東北大学出版会

〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1 東北大学構内  
TEL 022-214-2777 FAX 022-214-2778

## 流通経済大学出版会

〒301-8555 龍ヶ崎市平畑120  
TEL 0297-64-0001 FAX 0297-60-1165

## 聖学院大学出版会

〒362-8585 上尾市戸崎1-1  
TEL 048-725-9801 FAX 048-725-0324

## 聖徳大学出版会

〒271-8555 松戸市岩瀬550  
TEL 047-365-1111 FAX 047-363-1401

## 麗澤大学出版会

〒277-8686 柏市光ヶ丘2-1-1  
TEL 04-7173-3320 FAX 04-7173-3154

## 慶應義塾大学出版会

〒108-8346 港区三田2-19-30  
TEL 03-3451-3168 FAX 03-3451-3124

## ケンブリッジ大学出版局

〒101-0054 千代田区神田錦町1-10-1 サクラビル1階  
TEL 03-3291-4068 FAX 03-3219-7182

## 産業能率大学出版部

〒100-0005 千代田区丸の内1-7-12 サビアタワー9階  
TEL 03-6266-2400 FAX 03-3211-1400

## 専修大学出版局

〒101-0051 千代田区神田神保町3-8-3 専修大学5号館6階  
TEL 03-3263-4230 FAX 03-3263-4288

## 大正大学出版会

〒170-8470 豊島区西巢鴨3-20-1  
TEL 03-5394-3026 FAX 03-5394-3038

## 玉川大学出版部

〒194-8610 町田市玉川学園6-1-1  
TEL 042-739-8935 FAX 042-739-8940

## 中央大学出版部

〒192-0393 八王子市東中野742-1  
TEL 042-674-2351 FAX 042-674-2354

## 東京大学出版会

〒113-8654 文京区本郷7-3-1 東京大学構内  
TEL 03-3811-8814 FAX 03-3812-6958

## 東京電機大学出版局

〒101-8457 千代田区神田錦町2-2  
TEL 03-5280-3433 FAX 03-5280-3563

## 東京農業大学出版会

〒156-8502 世田谷区桜丘1-1-1  
TEL 03-5477-2562 FAX 03-5477-2643

## 法政大学出版局

〒102-0073 千代田区九段北3-2-7 法政大学一口坂校舎内  
TEL 03-5214-5540 FAX 03-5214-5542

## 武蔵野大学出版会

〒202-8585 西東京市新町1-1-20 武蔵野大学構内  
TEL 042-468-3003 FAX 042-468-3004

## 武蔵野美術大学出版局

〒180-8566 武蔵野市吉祥寺東町3-3-7  
TEL 0422-23-0810 FAX 0422-22-8309

## 明星大学出版部

〒191-8506 日野市程久保2-1-1  
TEL 042-591-9979 FAX 042-593-0192

## 早稲田大学出版部

〒169-0071 新宿区戸塚町1-104-25  
TEL 03-3203-1551 FAX 03-3207-0406

## 東海大学出版会

〒257-0003 秦野市南矢名3-10-35 東海大学同窓会館3階  
TEL 0463-79-3921 FAX 0463-69-5087

## 名古屋大学出版会

〒464-0814 名古屋市中千種区不老町1 名古屋大学構内  
TEL 052-781-5027 FAX 052-781-0697

## 三重大学出版会

〒514-8507 津市栗真町屋町1577 三重大学図書館3階  
TEL 059-232-1356 FAX 059-232-1356

## 京都大学学術出版会

〒606-8305 京都市左京区吉田河原町15-9 京大会館内  
TEL 075-761-6182 FAX 075-761-6190

## 大阪経済法科大学出版部

〒581-8511 八尾市楽音寺6-10  
TEL 072-941-8211 FAX 072-941-9979

## 大阪大学出版会

〒565-0871 吹田市山田丘2-7 大阪大学ウエストフロント  
TEL 06-6877-1614 FAX 06-6877-1614

## 関西大学出版部

〒564-8680 吹田市山手町3-3-35  
TEL 06-6368-1121 FAX 06-6389-5162

## 関西学院大学出版会

〒662-0891 西宮市上ヶ原一番町1-155  
TEL 0798-53-5233 FAX 0798-53-9592

## 九州大学出版会

〒812-0053 福岡市東区箱崎7-1-146 九州大学構内  
TEL 092-641-0515 FAX 092-641-0172